

〈講演会記録〉

京都産業大学創立 50 周年記念シンポジウム

「若泉敬先生の再発見 ― 沖縄返還交渉と日本の未来 ―」

東 郷 和 彦

50th KSU Founding Commemorative Symposium

Rediscovering Kei Wakaizumi: Negotiations on the Reversion
of Okinawa and the Future of Japan

Kazuhiko TOGO

2015年7月25日（水）、廣池千九郎記念講堂（廣池学園内）において標記の50周年記念シンポジウムが行われた。世界問題研究所はこれまでに研究会及び沖縄訪問を通して沖縄問題を多角的に検証してきた。本シンポジウムは、専門家の間での議論に終始することなく、研究所として蓄積してきた知見に基づき、広くこの問題意識を共有することを目的とした。就中、沖縄問題に深く係られた若泉敬先生の活動と日本の在り方に関する透徹した識見に焦点をあてた。シンポジウムの議論を通じて、そこから得られる知見を過去のものとしてせず、日本の未来に活かしていくという趣旨が表題に込められた。本紀要に収録されている講演会記録はそのシンポジウムにおける登壇者の発言の記録であり、会の終了後に加筆修正したものを掲載している。

7月に行われたシンポジウムとあわせて車の両輪をなすものとして、2015年12月23日（水）には、京都産業大学むすびわざ館において50周年記念シンポジウムの第二弾に位置づけられる『沖縄問題と「複合アイデンティティ」』を開催した。第二弾のシンポジウムの講演記録は世界問題研究所紀要第32巻に掲載される。

シンポジウム・プログラム
2015（平成 27）年 7 月 25 日
於 廣池千九郎記念講堂（廣池学園内）

開会の挨拶：大城 光正（京都産業大学学長）

基 調 講 演：「沖縄返還交渉と日米関係の一側面（若泉敬先生を偲ぶ）」

佐伯 浩明（元産経新聞政治部編集委員）

パネルディスカッション

発 題 者：「日本の安保政策の形成と若泉敬先生」

西原 正（一般財団法人 平和・安全保障研究所理事長）

「日米交渉外交官としての若泉敬先生」

東郷 和彦（京都産業大学世界問題研究所長）

「京都産業大学における若泉敬先生」

吉村 信二（京都産業大学 五期卒業生）

司 会：所 功氏（京都産業大学名誉教授、公益財団法人モラロジー研究所教授）

京都産業大学創立 50 周年記念事業
シンポジウム

「若泉敬先生の再発見 ― 沖縄返還交渉と日本の未来 ―」

平成 27 年 7 月 25 日（土）
廣池千九郎記念講堂

基調講演

「沖縄返還交渉と日米関係の一側面
（若泉敬先生を偲ぶ）」

ジャーナリスト、元産経新聞政治部編集委員
佐伯浩明

Negotiations on the Reversion of Okinawa and One Aspect
of Japan-U.S. Relations: In Recollection of Professor Kei Wakaizumi

Hiroaki SAEKI

本日このような貴重な講演の機会をいただいたことに対して、心よりお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。私は、今日ご登壇いただく他の先生方と異なり学者、研究者ではありません。ジャーナリストとして当に自分の知る範囲内の数少ない断片をつなぎながら、若泉先生の学生時代に結成された学生研究会「土曜会」の後輩として、思い出に残る数々、あるいは近年、出版された先生の伝記などを基に、そのお人柄について話すことができればと思います。

若泉先生の視点と現代的意義

最初に若泉先生について、沖縄返還交渉に託し先生が現代日本人に伝えようとした志、国際政治観

について話したいと思います。大きな枠で述べますと、この沖縄返還交渉と若泉先生のつながりというのは切っても切れない性格をもっていることが分かります。最近、再び国際平和支援法案と平和安全法制整備法をめぐるいろいろな世論調査が出ておりますが、例えば平和安全法制を否定する世論が盛り上がり、一時的に安倍総理の支持率が下がりました。この支持率が下がっているにもかかわらず、安倍総理は7月15日に、断固として初志を貫き、衆院本会議で平和安全法制を通したわけです（9月19日に参議院本会議にかけて成立、同30日公布）。その決然とした姿勢は、ある意味できょう講演のテーマである若泉先生と通じているところがあるのではないかと思います。

そこから話を始めたいと思います。日本は今年で戦後70年ですが、振り返りますと、先の大戦で本当に何百万という犠牲を払い国民並びに多くの将兵が亡くなっています。その戦争の悲惨さの前にして思うことは、「どうしてもやはり日本は平和の構築を目指して生きるべきだ」ということです。しかし、ともすると意見の対立が噴出していろいろな争点になるのです。

残念ながら今の世論調査、あるいは報道のあり方を見ていますと、その原因は報道に際し、若泉先生が大事にしている重大な視点を考えずに、ことごとく意図的に抜け落としてきたためにこの対立が消えずに残っているのではないかという気がします。

それは何かと申しますと、若泉先生が大事にしたことは、まず第1に、国際的な視野を持つことの大事さです。第2はパワーバランスの重要性の認識です（注1）。これは常に日本の将来を考えると、各国の状況、日本を取り巻くアメリカ、ロシア、中国、そういう状況を見ながら、日本がどうあるべきか、と考える。多分、若泉先生がご存命だったらそう考えたのではないかと思います。ところが、皆さんご存じのように、テレビなり多くの新聞を拝見していますと、国際情勢に関する分析は非常に欠落しています。いわゆる憲法9条との関係で、「憲法9条の平和志向の精神に反しているのではないか」がどうしても見出しになったり、社説になったり、論説になったりする。あるいはニュースの中で取り上げられます。各種の世論調査を拝見しますと、「いざというときに武器を持って戦う気があるかどうか」とか、いろんな重要な質問をしていますと、ご存じのように日本の若い青年が示す数値は他国の若者に比べて非常に低いのです。その中でも例えば日本の周辺、中国、ロシア、あるいは台湾、アメリカ、韓国それらに比べて日本の青年たちが示している重要な数値は非常に低い数値になっています（注2）。それから「父親を尊敬していますか」とか、あるいは「先生を尊敬できますか」とか、いろんな「家族」のことについても数値が出ていますが、これもまた驚くほど日本の若者の数値は他国に対して低いのです。

私は、これは戦後教育が果たして正しかったのかどうかということと大いに関連があると思うのです。それはさておきまして、若泉先生がずっと生前に非常に心配されていた現象が、今もって消えていないのではないかと思います。それを絶ち切るために最初に若泉先生が志を立てられたのが15歳のときです。若泉先生の伝記、あるいは評伝がたくさん書かれています。皆さんもお読みかと思いま

すが、代表的な作品には森田吉彦先生が帝京大学文学部准教授時代（現・大阪観光大学教授）に書かれた『評伝 若泉敬 — 愛国の密使』（文藝春秋社）があります。若泉先生が思われたことを非常に簡潔に紹介しています。土曜会という戦後間もなく生まれた学生のインターカレッジの団体があります。この土曜会はどういう経緯で結成されたか、それもまた後ほど紹介したいと思います。その土曜会の後輩で後藤乾一先生（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科名誉教授）が書かれた評伝『「沖縄核密約」を背負って — 若泉敬の生涯』（岩波書店）もあります。非常に優れた、非常に精緻に調べられた評伝だと思います。

しかし、何とんでも若泉先生の思いが一番直截に伝わってくるのは、ご自身で遺書として書かれたと思われる沖縄返還交渉を記した『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（文藝春秋社）という一冊の本です。この中に大体若泉先生が何を訴えたかったのか、あるいはどういうことを考えておられたかということが書き盡されています。戦後の重要な一側面に関する歴史的事実についての考察です。ご本人が誓約をしているように、沖縄返還交渉の推移が克明に書かれています。これは日本の外交関係の書籍で、枢要な交渉の地位にあった人物がこれだけ精緻な内容の本を書くことはほとんど希です。世界に通用する国際政治観が盛り込まれた一流の外交書であり、かつ歴史書になっていると思います。それを成し遂げた若泉先生はどういう人物かということを読み起こしていきたいと思います。

若泉先生の人物像

若泉先生は、北陸の福井県今立郡服間村にお生まれになりました。福井の山村で、今で言う越前市の北東部に当たるのですが、越前市の山深い篤農家の家に生まれておられます。お父上も地元で非常に尊敬された方で、地元の世話もよく焼き、非常に学問、漢籍に長けた方だったようです。お父上が原敬のことを非常に尊敬していました。原敬と言えば大正デモクラシーを象徴する代表的な政治家ですが、この原敬に因んでつけた名前が若泉敬の「敬」です。これは「たかし」とお読みするのですが、後々皆さんが若泉「けい」と呼ぶので、それが通り名になっていたりします。しかし、このお父さんの原敬に対する思い入れがいかに強かったかというのは、お嬢さんに対しても敬子という名前をつけて、お2人に「敬」の字をつけているのです。それぐらい原敬のことを尊敬していたお父上のもとで育ったのが若泉先生です。

小さいころは非常にわんぱく小僧で、いわゆる悪童連を率いて、割合頭がよかったというか、大将格の存在だったというふう聞いております。よく学校の先生を困らせるために天井裏に潜り込んだりとかしたというエピソードが若泉先生に関する本に書かれております。

それと同時に、実は若泉先生が最初に志を立てる大きな出来事がありました。それが昭和20年7月19日に起きた福井市のB29による爆撃です。焼夷弾が降ってきて、福井市全土が焼け焦げ落ちた

わけです。このときの死者は1,600人と言われています。若泉先生は本当に命からがら逃げまどったのです。気がついてみたら翌日未明、小さい少年の手を引いて、そして焦土と化した福井市街を見降ろしていた。

そのときの思い出を先生は書いています。県紙の新聞「日刊福井」、昭和56年の8月15日、ちょうど終戦記念日です。先生は連載コラム「正言」というコラムを持っておられまして、それにずっと書かれていたのですが、そのときのタイトルが「魂をなくしたか、日本の繁栄。静かに国の将来を考えよう」と題する一文です。若泉先生が15歳のときの福井の焼け野原と化した光景について書いています。

「毎年暑い夏がやってくると深い感懐が筆者の胸中をよぎる。恐らく同世代の人々に共通して言えることだろう。36年前の7月19日、福井空襲の惨禍に遭い、旧盆の本日、未曾有の敗戦を迎えた。時に15歳、私にとってそれは価値観のコペルニクスの展開を含む恐るべき大衝撃だった。当時は判断力も未熟で、そもそも何が起こったのか、なぜこういうことになったのか、容易に納得はいかなかった。今、静かに顧みると、国の運命にかかわるこの体験が私のささやかな人生を決定づける原点となった。全国主要都市が焼け野原と化した。その一画に呆然とたたずみながら、こんな戦争を二度と繰り返してはならない。これから日本はどうしたら立ち上がるのか。そして進むべき道。よし、広い世界に出かけ、天下の大勢を見ながら日本の行方をじっくり考えてみよう」

つまりこの15歳の衝撃的な体験がもとになって若泉先生は志を立てられたわけです。「爾来、国際的日本人を目指し、国際政治の研究と実践に打ち込んできた次第である」と、こういうふうに書いています。東京や京都、大阪から比べて、北陸の地は非常に厳しい条件なのですが、先生はそのときからもう「国際的日本人を目指し」学問に励まれた。

若泉先生は生涯に渡って色んな先生、師に出会われています。それらの出会いを若泉先生はことごとく生かす方向に動かれていることが、先生の生涯を追うとよくわかります。先生が最初に刺激を受けたのは福井師範学校（現・福井大学教育・地域科学部）きっての秀才とうたわれた地理の先生で、吉川文次先生という方です。「世界の地理・地勢を知らずして世界を考えることはできない、との彼の教えこそ若泉の求めていたものだったのである」（『評伝 若泉敬 — 愛国の密使』）と、森田先生は指摘していますが、この吉川先生は「世界の地理とか地勢とか、世界に目を向け、見ていかないと日本のこともわからないし、世界のこともわからないのだ」と。福井師範学校でそういう先生の教えに若泉先生は共鳴されたわけです。

若泉先生と土曜会 ― 学園闘争の中で ―

その昭和 24 年、1949 年。若泉先生は、いわゆる立志を抱いて上京し、最初、明治大学を受け合格をしたのですが、翌年、東大法学部を受け直し合格したのです。皆さんはもう既に世代にご存じない、あるいは若干ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、終戦直後の昭和 27 年、1952 年前後、これは実は共産党の火炎瓶闘争や過激な武力闘争が燃えたとぎって、「血のメーデー」と言われた皇居前広場でのメーデー事件では 5,000 人とも 6,000 人とも言われた労働者と警察官が対峙して、多くのけが人が出た時代でもありました。この共産党の極左暴力路線がしばらく続いて、それが全国の学園にも及んでいったのです。学園の中にもそういう風が吹き荒れて、共産党主導による全学連が東大の学内で主導権を握っているところが多かった。それに対して学園の自由、学問の自由を求めて、そういう荒れた学園を直そうとして、昭和 25 年、1950 年に学生有志が立ち上がって結成されたのが「学生土曜会」という学生団体だったのです。これは東大だけではなく、東工大とか、早稲田とか、慶応とか、明治とか、それからお茶の水女子大、津田塾大とか、女子大からも参加があったのですが、最初は 20 名ぐらいで集まって、とにかく「学園を学問の府に戻し、正常化しないといかん」ということで立ち上がった。

今日ここにもその学生土曜会の OB の先輩方にも来ていただいておりますが、この学生土曜会が目指したものは、一つは人権の尊重というか、ヒューマニズムを大切にして、いわゆる暴力的な学園闘争を否定したことが一つ。第二は議会制民主主義、いわゆる自由民主主義の道を目指そうという理念・思想で、当時の東大の中では非常に穏健な考え方の集まりだったのです。ただ、残念ながら、当時の学園では大部分の東大生はほとんど動かなかったのです。その荒れた学園を立て直そうと動いたのは本当に少数派だった。その少数がいわゆる学生土曜会、あるいは、その後、土曜会 OB らが立ち上げた「有志の会」の結成とか、志ある学生や社会人の動きがいろいろありました。

そこに若泉先生が入られたのは土曜会結成の 2 年後ぐらいです。この土曜会のつながりは非常に結束というか、紐帯の強いものでした。「日本の行く末がこのままでは危うい」ということで、自分の学問もやりながら学園の民主化に立ち上がったのですが、そこからたくさんの人物を輩出しています。例えば皆さんご存じの警察庁出身で、後に防衛施設庁長官もやり、そして内閣安全保障室の初代の室長を務められ、危機管理の専門家として活躍された佐々淳行氏、月刊『中央公論』編集長として鳴らした粕谷一希氏。粕谷先輩が起用された執筆者陣は、例えば東大の東洋史関係の衛藤瀋吉教授、それから京都大学の国際政治学を担った高坂正堯教授、京都産業大学教授になられた若泉敬先生がいらっしゃいます。さらに土曜会には、若泉先生の薫陶を受けているお一人として、外務事務次官などを経て現在の国家安全保障局長に就任された谷内正太郎氏などいろんな先生方・先輩方がいらっしゃいます。いずれの先生方も自由と人権の尊重を大切にしていた英米など議会制民主主義体制をとる国々を

支持し、ソ連、中国など共産党の一党独裁体制をとる社会主義圏諸国の有りかたを批判的に見ておられました。いわば粕谷先輩は、戦後日本の論壇に保守主義、現実主義の潮流を築かれた編集長です。当時、一番勢力が強かったのが朝日新聞や月刊誌『岩波』に執筆する社会主義イデオロギーにシンパシーを抱く論壇人の方々と、今とは違って人気を誇っておられたのです。そこに対抗して中央公論の編集長として活躍されたのが粕谷先生です。その他に土曜会には内閣の初代広報室長をされた宮脇恭介氏、三菱銀行取締役から東山農事社長を務められた岩崎寛弥氏とか、いろんな方がいらっしゃいました。

こうした方々が学内で全学連の学園暴力闘争に断固反対の動きを活発にされた。若泉先生は当時、非常に物騒な東大構内の雰囲気だったのですが、あえて毎日新聞に名前と顔と住所を出して、その学園の正常化を訴える一文を書いています。これは非常に身の危険を伴う行為でした。しかし、身の危険も顧みずにやらなくてはいけないことは断固なさろうとしたのが若泉敬先生です。後に防衛庁の事務次官になった矢崎新二氏がいらっしゃるのですが、矢崎先輩は若泉先生のそういった他を顧みない無鉄砲なところに非常に危惧を覚え心配されたそうです。若泉先生は毎日新聞の記者から「名前も顔も出していいですか」と聞かれて、「どうぞ構いません」というふうに決然と言いつつ切った。これはなかなかできることじゃないのですね。極左暴力路線の嵐が吹きまくっていた時に、そういうことを言える精神はなかなかないと思います。

私はそういうことができたのはいつの時代だったかと考えた時に浮かんだのは、やはり明治維新です。あの時代に活躍した坂本龍馬であり、あるいは橋本左内、すなわち橋本景岳です。こういう人たちと相共通する精神の強さというのか、意思の強さ、正しいもののために身を投げ打ってでもやるのだ、という精神の強靱さ強さを若泉先生の姿勢に感じます。

こうした自由主義精神の学生の動きを支えた方々がたくさんいらっしゃいます。もう亡くなられたのですが、西洋史がご専門の林健太郎東大教授、あるいは文芸評論家の福田恒存氏とか、あるいは共産主義の理論的過ちを指摘された慶応義塾大学の塾長をやられた小泉信三先生とか、若泉先生ら有志の方々は、そういう先生方を積極的に訪ねて教えを乞うた。本質を突いた勉強会をやりながら、どんどん社会に提言していく。例えば当時から月刊誌『経済往来』があり、ここに土曜会有志の先輩方が自分たちの考えていることを提言された。それがまた非常にマスコミ的にも反響を呼んで、学士会の会員名簿をもとに何千人に手紙を送って同志を募ったところ、5,000人近くの学生が賛同の反応を寄せてきた。これは何もしないで、座視する普通の学生と違って、私は行動する知識人の前身をこの学生土曜会が担っていたのではないか、と思った次第ですが、その中でも中核的な存在の一人が若泉敬先生でした。

昨今の安全保障の議論に欠けている視点

その若泉先生が後に取り組みられるのが安全保障問題です。この安全保障問題について、「やはりこの日本のあり方がこれでいいのだろうか」ということを常々感じておられていました。それは何かと言いますと、例えば今の平和安全法制の問題で、盛んに憲法学者の発言が注目を浴びて、「憲法学者の9割9分が反対とか、あるいは1万人が反対署名をした」と言われていますが、今の憲法にはそう言わざるを得ない側面があります。例えば今の憲法9条を本当に文章的に考えますと、芦田修正がありはするのですが、それでもなおかつ憲法学者の言われるように「自衛隊を持つことは違憲だ」と言おうと思えば言える側面があるわけです。同時に、戦後の日本のスタートはまるで丸腰だったものですから、日本を守る存在としての日米安保条約を結んで、日本の防衛をアメリカに委ねざるを得なかった事情があったわけです。その現実の構造は核抑止一つをとっても今もって変わっていません。

ですから、基本的にはやはり今の日米安保体制と憲法9条の構造を見てみますと、「日本はアメリカを守る義務はないけれども、アメリカは日本を守る義務がある」というふうに日米安保条約ではなっているわけです。いわば日本は世界第3位の経済大国でありながら、アメリカの核抑止力に守られている存在なわけです。その中でこの憲法9条を抱えながら、果たしてこの条文のままでもいいのかと。そういう深刻な議論が、現在はまるで捨象されているわけです。

同時に、日本の安全保障にかかる2014年度の防衛費をGNP比で対比（世界銀行調べ）して見ますと、大概ほかの国は2%台（韓国、インド、中国）、3%台（米国）、5%台（イスラエル）、多いところで10%台（サウジアラビア）というところもあります。これは例外的です。しかし、日本はわずか1%未満なのです。これは先進国というか、国連の加盟国193カ国中で121番目、要するにそのクラスです。数字的に本当に客観的な目で見ると、我々の防衛努力は「これでいいのだろうか」と疑問のつく今の体制なのです。それから、この憲法自身が日本人の手によって書かれているのか。この辺も若泉先生が折に触れて考えられていたところなのです。

若泉先生の海外経験

こういう日本の行く末を考えながら人生を歩まれた若泉先生は、土曜会を経て、東大卒業後の昭和29年・1954年4月、当時の保安庁の保安研修所に入られた。この保安研修所は、後に防衛研修所（現・防衛省防衛研究所）と名前を変えたのですが、翌年、ロンドン大学に留学される。ここでいわゆる安全保障論から外交論まで、いろいろなことを学んでおられます。普通、入社して留学経験というのが与えられても半年間か1年だと思うのです。ところが、若泉先生は「帰ってこい」というのを、「いや、こういう理由でもう少し勉強したい」と言って3年間、留学しておられる。そのときの所長

は北村隆先生という方だと思うのですが、北村所長は「どうせ3年といってもすぐ帰ってくるだろうから一応許可を出しておいてやろう」ということで出したのです。ところが、若泉さんは1年では帰らなかった。やっぱり3年おられた。最初の1年は語学で四苦八苦するわけです。しかし、若泉先生は、一旦志を立てられたら曲げませんから、英語の勉強を猛烈とやられる。2年目、3年目となるに従って英語をものにされ、最後の1年はBBC放送の日本語向け放送を担当し、非常に活躍の場を勉強しながら広げておられる。ただの留学ではなく、留学してもそれを何か次に生かしていく、そういう積極性に非常に富まれている。そこが我々後輩から見ていて非常に魅力の溢れた先輩と映りました。

また、若泉先生は学生時代の昭和27年・1952年に既に日本の国連協会から派遣されてインドに行かれています。ニューデリーで開かれた第1回アジア国連学生大会に出席しています。これも若泉先生の特徴だと思うのですが、その際にも、国際大会に出席するだけではなくて、ついでにハイデラバードとかカルカッタとか、インド各地をかなり巡っているのです。そして現地の学生と交流をしていろいろ話を聞く。さらに、これはなかなかできないのですが、大会で親しくなったビルマの学生に誘われて、当時のビルマを何と2カ月半も回られています。「日本の学生が来た」というので非常に歓迎されて、みんなから大切にされたそうです。

ミャンマーから考えるアジアを観る眼

これは有名な話ですが、今の東南アジア一帯ではインドの独立、アジア解放を目指す独立運動には、インド独立工作を担ったF機関（藤原岩市中佐）という名称で有名な日本陸軍の政治工作が深くかかわっていました。英国統治下で政治工作をしてアジア諸民族の独立運動支援を目指した。日本に勢いがあるうちはその独立工作運動がどんどん成果を生んで、本当に親日機運がどんどん広がっていったのですが、最後は皆さんご存じのように日本軍の敗色が濃くなり、ビルマ・インドの国境ではインパール作戦という無理な作戦を行い、さんざんな目に遭って、多くの犠牲者を出して日本軍は撤退するわけです。

その撤退する時に、今まで親日的だったビルマ義勇軍が今度は、独立目的を貫徹できるよう日本に対して反旗を翻して、イギリスと一緒に戦って日本を追い詰めるという行動があったわけです。しかし、だからといって、「ではビルマが反日か」というと、そうではないのです。それはなぜ証明されるかということ、そのとき戦った後の光機関に収斂されてゆく日本の工作部隊の工作活動に携わった方々は、大東亜戦争後、独立したビルマの国軍記念日に招待されて、表彰されるなど、国賓待遇で手厚くもてなされています。

ですから、今、「アジア侵略」という一言でくくられていますが、中国、韓国、そして東南アジアを見るに際して、単に「侵略」という言葉でくくることができない歴史があります。藤原岩市中佐が、

終戦後に陸上自衛隊の陸将軍になられているのですが『留魂録』（振学出版社）という立派な回顧録を残しています。それを読むと、いかに当時の日本の人々が、インド・東南アジアの独立運動に身を呈していたかということがわかります。ところが、今の若い学生はそういうことをほとんど知らずに育っています。残念なことです。

若泉先生の思想の根底 — 信義・愛情 —

一番大事なことは何かということを保安研修所時代の副所長の松谷誠さんという方が言っておられます。その松谷副所長のお考えを紹介させていただきます。「信義・愛情ということは国籍のいかんにかかわらず終始持ち続けていかねばならないし、一生つき合える外国人を持つことは今後ますます大事なことと信ずる。国際間においてもやはりヒューマンリレーションが必要である。いかに国際間で約束してみても、その実行の段階になるとやはり人間関係がその基本的要素となってくる。こうした松谷の信念は、若泉がおのれの信念となってくる」。これは森田教授が『評伝 若泉敬』の中で紹介していることですが、若泉先生を見ていると、確かにこういうことが言えると実感されます。信義・愛情ということが大事だということが若泉先生の思想の根底にあると思います。

この根底があつてこそ、英国の歴史家、トインビー博士さん、あるいはマイク・マンズフィールド駐日大使とか、駐日英大使のヒュー・コータツツイ氏とかいろんな高名な方々、あるいはアメリカの政府高官の方との長いおつき合い、友情を築かれたのだと、回想される次第です。基礎にあるのはこの考え方です。人間若泉敬先生を非常に豊かにし、決して紋切り型でもない、あるいは杓子定規でもない、非常に温かみのある行動する学者像を形成していったのではないかと推察されます。同時に、英語を最初に3年やったことも、物怖じせず本当に大事な人の懐にさっと飛び込んでいける行動力を身につかせた、と思われまふ。これはなかなかできないことです。

これができる人はなかなか少ないのです。私は産経新聞政治部時代に防衛庁・外務省を担当したのですが、非常に印象に残る方は、こちらも先般亡くなられた岡崎久彦氏という外交官でした。駐サウジアラビア大使、それから駐タイ大使をされた。韓国の公使時代に、岡崎氏は確か赴任の前に韓国語の語源の研究から始めておられる。徹底的にハングルを勉強して、同時に、韓国の李朝は勿論、高句麗、高麗など歴史を徹底的に勉強して、それから赴任されている。そのために、岡崎さんは駐韓公使をされた時に相手の懐に飛び込むことのできる実力を身につけられた。本当の外交をやろうとした場合に絶対的に必要な条件だと思います。今、日本の多くの大使の中で、自分から飛び込んでいって総理なり、大統領なり、あるいは国王なり、皇太子なり、相手の懐に飛び込める外交官は少ないと思いますが、そののできた一人が岡崎さんであり、同系列につながるのが若泉先生ではないか、と思われまふ。

若泉先生の日本観と沖縄

若泉先生が沖縄問題にのめり込んでいく経緯というのは、「日本のあり方がこれでいいのだろうか」という疑問が常々頭にあったがために、この問題に飛び込まれたと思うのです。新聞「日刊福井」の昭和56年8月15日、先ほどのコラムです。先生はその出だしに丸括弧で（我が国の躍進と繁栄を絶賛した上で）と書かれた。これは1981年ですから、すでに高度成長を遂げ日本が経済的にどンドン経済大国に向けて躍進していった時期です。先生は次いで「このようなめざましい発展にもかかわらず、今日の日本人は心理的に、哲学的に根無し草のようにさえ見える。過去と全く結びつかず、未来に対しても無関心で、まるで現在に酔っ払っているみたいだ。日本に精神的基盤がないことは問題である。国民を団結させ、国家目的を確立させるのに重要な働きをした伝統が崩れてしまったのである。日本は第二次世界大戦で軍事的に敗北したとき、道徳的にも降伏してしまった。日本は魂を失っている。その意味で、鉄骨は天空にそびえ、ネオンは夜空に輝こうとも、何かしら痛ましいものがある。人々はものをつくるのに余りに夢中で、個人の、そして国家の運命を考える暇がないのではないかとさえ疑われる」

これは実は若泉さんが言われたのではなくて、60年安保と70年安保のちょうど中間の1964年に、ジャーナリストで思想家と言われたノーマン・カズンズ氏がサタデー・レビュー紙に書いた日本印象記の一部要約です。

このカズンズ氏の言葉を借りた若泉先生の思想・哲学、日本感というものから、「本来の日本を取り戻さなくてはいけない。やはり沖縄が日本の地である。」という考えが出てくる、と思えるのです。「沖縄の返還なくして戦後は終わらない」という佐藤栄作総理の自民党総裁選における有名になった文句があります。これは佐藤栄作さんが藤山愛一郎とか池田勇人さんと3人で争ったときの総裁選の記者会見の時の名文句につながる。若泉先生の中で「自分たちがただ繁栄に酔いしれているだけではだめだ。この沖縄のことをきちんと考えないといけない」というご自身の哲学、思想の一環として行動に移されるわけです。その中で自分が担うべき課題として、また安全保障政策上も欠かせない外交課題としてかかわったのが沖縄返還交渉です。

この沖縄返還交渉は非常に難しい問題でした。当時ベトナム戦争があって、ケネディ大統領、ジョンソン、そしてニクソンと歴代のアメリカ政権は、ベトナム問題に腐心して、小国と思われていた共産政権の北ベトナムと南ベトナム解放民族戦線を相手に苦戦していて非常に厳しい時期だったわけです。その状況下において、果たして米軍基地という重荷を背負った沖縄の返還が可能かどうかと問われていた時に、「この問題の解決なくして日本の戦後はない」という決意で若泉先生は取り組まれている。若泉先生は前述のコラムの中で指摘されています。

「我々は何をなさねばならないのか。数多くの国家的課題の中で筆者は本欄でも何回か最も基本的な問題提起を試みてきた。即ち、第一に、国民の英知と想像力を結集し、二十一世紀に向けての新世界秩序形成を目指す日本の国家目標と政治戦略を再興すること。そのことは“無関心”、“根無し草”、“道徳的幸福”と決別し、日本人の新たな『精神的基盤』の確立をも意味するであろう。第二に、期待されている我が国の国際的役割や貢献について、必要で可能な最大限のことを、たとえそれが自己犠牲を伴っても実行すること。相互依存度の高まる世界で、民主主義の“経済大国”日本は意義深い寄与をなし得る一方、もし逆に、孤立化したら生きていけないことは明白である。」

若泉先生の死者に対する思い

その沖縄返還交渉の中でも若泉先生の考え方の非常に特徴的なところは、死者に対する鎮魂の思いが人一倍深いということです。この深さは尋常じゃない。1969年11月21日、佐藤栄作総理大臣とリチャード・M・ニクソン大統領との日米首脳会談を経て、日米共同声明が発表された。3年後の沖縄の「核抜き本土並み返還」を確約した内容だが、先生はその1か月ぐらい後の12月に、ひなを夫人とご長男、ご次男のご家族4人で沖縄に慰霊の旅をしておられます。学者、外交官と言われた多くの方々が沖縄返還交渉に関わっていますが、一家で沖縄に慰霊の旅をされるというのは他に例を見ない本当に特異な行動だと思います。

先生の心の中にあったのは、前述したように死者に対する非常に深い鎮魂の思い、あるいは死者が何を望んでいたか、恐らくそれを最後まで考えておられたのではないかと私は思います。沖縄の人々のため、あるいは日本の平和を守るために沖縄で多くの将兵が亡くなり、軍属が亡くなり、そして市民が亡くなっているわけです。同時にアメリカ軍も多くの死者を出しました。このことに対する鎮魂の思い、そして亡くなった兵士が何を望んでいたか。「再び沖縄を本土に早く復帰させてほしい」と若泉先生自身は思っておられたのではないかと。

この死者に対する思いというのは非常に深いものがあります。『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』も、初版もそうですが、本書は最初に先の大戦で本土防衛のために沖縄戦で亡くなった死者に対する「鎮魂献辞」という言葉で始まっています。「1945年の春より初夏、凄惨苛烈を極めた日米沖縄攻防戦において、それぞれの大義を信じて散華した沖縄県民多数を含む彼我20数万柱の全ての御霊に対し謹んでご冥福を祈念し、この拙著をささげる」と書いています。この本の『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』というのは、「これ以上、これ以外に最善の策はない、この策しかない」、と陸奥宗光が『蹇蹇録』で思いを込めた文言から取っています。この沖縄返還交渉における核密約交渉の真実を記したと言われている『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』という本は、そういう書籍なのです。

その中で若泉先生は、わざわざ沖縄県史から死者が何人、民間の人が何人、日本人将兵が何人死んだ、軍属は何人死んだ、またアメリカ将兵が何人死んだ、と実にきちっと数字を挙げてまで上げて報告しています。同時に、先生は沖縄返還交渉が成功した後、なおかつ晩年、膀胱がんになられていて、体が非常に弱っておられたのですが、無理を押しつつ沖縄の戦いで戦没した方々の遺骨収集に行かれています。これもほとんど常人のなし得ることじゃないというか、ほとんどの人は思いつかない行動です。それはひとえに沖縄戦で亡くなった方々に対して、物言えぬ将兵・県民に対して「自分がなさねばならないことは何か」ということを考えてのことではないかというふうに思います。その思いは、テレビなどでいろいろ報じられていますが、この死者に対する若泉先生の思いは、他の人には見られない深さです。

核兵器持ち込みをめぐる合意議事録について

この沖縄返還の有名な非常時、いわゆる有事における核兵器の再持ち込みをめぐる合意議事録をめぐって、若泉先生はキッシンジャー・ニクソン大統領特別補佐官といつも徹夜に近い電話のやりとりをしています。自分の身命をすり減らしながらキッシンジャーとのやりとりをし続けた末に結実したのが、日本有事における核兵器の再持ち込みを確約した、日米首脳がサインした合意議事録なのです。この秘密合意議事録は、存在が一時期疑われたりしたのですが、後の民主党政権下の検証で東京・世田谷区淡島の佐藤邸にあったことが確認されており、そのことが後に読売新聞に詳しく掲載されました。ですから、今は核合意議事録についてはその存在は確かになっております。

しかし同時に、「あの密約がなければ日本に核を持ち込めなかったか」というと、そんなことはない」と言う学者の方もおられます。「日本有事で日本の生存が危うくなれば、一片の紙切れがあろうとなかろうと核兵器は持ち込まれるだろう」と言う学者さんもいらっしゃる。先生の交渉相手だったキッシンジャー自身も非常にその点については厳しい見方を確か回顧録で書いています。そういう命がけの交渉をした末に核の合意議事録を日米首脳間で取り交わしたわけですが、沖縄が返ってくることが公になったいわゆる「核抜き本土並み 72 年返還」という 1969 年の 11 月 21 日、その日米首脳の間合記者会見における発表を聞いて、すぐ若泉先生は東京・荻窪の家を飛び出して、向かった先が靖国神社だったわけです。まだ未明ですから扉は閉まっています。若泉先生はその靖国神社の大扉の前にぬかずいて、「核抜き本土並み 72 年返還」が成ったことを神前に報告し、滂沱の涙を流されたことが、この遺書ともいえる本に書き遺されています。それぐらい自らの行為に誠を捧げて来られた。

歴史を省みるということ ― 若泉先生の学びの姿勢 ―

私が大事にしたいのは、日本人はもっともっと自分たちの歴史を大事にして省みるべきだと思います。自らを省みて余りにも自分たちの父祖が築いた歴史を知らないし、自分たちの国がどういう成り立ちになっているかも知らないことに思いを致すべきではないかと思います。若泉先生は晩年まで歴史に学ぶ姿勢を崩さなかった方です。

先生が鯖江に引き込まれて、たまたま東京に出られたときに何人かで話しを交わす機会がありました。そのときに「日本の伝統文化について誰が一番よく知っているか」というふうな質問を後輩の私たちが受けました。そのときに私がお答えしたのは、古典をもとにした日本の文化に造詣の深い保田与重郎という日本浪漫派の文芸評論家でした。保田先生のごことは、土曜会の先輩で若くして他界された中央公論編集長をされた平林孝先輩から教わり知ったのですが、戦前は『日本の橋』、戦後は『わが萬葉集』『日本の美術史』などの優れた作品を書かれました。なぜ保田先生を挙げたかといいますと、満州、あるいは中国の地に行った兵士の兵囊の中に、この保田与重郎さんの本がたくさん入っていたのです。保田先生は、アジア民族解放の精神を大事にされておられ、当時の日本の青年の心をかきたてる深い浪漫的精神が込められた作品が多かったのです。「ぜひ機会がありましたら読んでみてください」と奨めましたところ、若泉先生はほどなくして当時、京都の鳴滝におられた保田先生のご自宅を訪ねて、日本の文化、あるいは皇室の本質についていろんなことを会話された模様です。どういう会話だったかということについては残念ながら伺う機会がありませんでしたが、そういう風に晩年まで自分の足りない異分野も常に補って、そのために当時の一流と言われる皆さんに会いに行かれて、それぞれの本質をつかんで我が実とされるのが、若泉先生の生涯だったのではないか、と思われまます。

最後にちょっと申し上げたいのは、やはり歴史を省みることの重要性です。実は同じく「正言」の中でこういうことを若泉先生も一番言っておられます。

「『過去を振り返ることは将来について責任を担うことである。』とは、さきに来日されたローマ法王の箴言である。まさにしかり。今日我々が過去を省みるのは単なる懐旧ではなく、これからの日本について責任を担う意志を再確認するためである。仮にもカズンズ氏の観察どおり、今の日本人が現在の繁栄に酔いしれて国の運命を考える暇がないとすれば、それは単に痛ましいことにとどまらないであろう。みずから努力して築いた繁栄を享受することはもちろん結構なことである。それを肯定した上で、あえて自問したい。それだけでよいのだろうか。それはこのまま永続するのだろうか。さらには、人はパンのみでは生きられない以上、物質的繁栄はしよせん個人にとっても、国家にとっても、それ自体で真の生きがいや究極的目的とはなり得ないのではあ

るまいか」

つけ加えてご紹介したいのが、岡崎久彦氏の言葉です。若泉先生の疑問のいつも尽きないところを別の形で言われたのが岡崎先生ではないかと思しますので、『百年の遺産』（扶桑社文庫）という本の中で読者に説いている下りを読み上げたいと思います。

「人間でも、国家でも、失敗の経験は貴重なものです。大失敗はめったにするべきでもないのですから、それから教訓を学び取らない手はありません。しかし、戦後の日本が学んだのは、戦争の悲惨さともう戦争は嫌だということだけで、あれだけの戦争をしながらこれほど学ばなかった国も少ないと思います。実は敗戦後、幣原喜重郎は敗戦の原因究明こそ日本再建にとって重要課題だと考えて、総理みずからが会長となって戦争調査会を設置しました。ところが、対日理事会が、旧軍人が参加しているということを理由として、これは次の戦争に負けなよう準備しているのだと非難しました。旧軍人を外したらという意見に対して、幣原は、とんでもない、軍人の参加なしでは意味がないという意見でした。当時の吉田首相が占領軍を説得しても聞かず、結局は中止となり、その後は日本人の手による調査は行われず、戦争の歴史の解釈は軍事裁判のなすがままとりました」

これはいわゆる東京裁判を指しているわけです。この状態は今も継続しています。それから今の憲法のあり方も敗戦の姿が継続されたままの憲法です。若泉先生自身は、はっきりと「これでいいのだろうか」と我が身をもって提言をされたのではないのでしょうか。

ま と め

やはり敗戦後の日本がたどった歩み、それから敗戦をどう受けとめたらいいのか。若泉先生はそれを再検討して、真の平和のあり方、日本外交のあり方、翻って若泉先生は地球のあり方まで考えて、哲学と思想の再構築が必要だというふうに言われています。その視野の広さ、平和を希求する心、あるいは真理を探求しようという知的探究心には、他に例を見ない非常に強いものがあります。ここを私たちは学んでいければと思う次第です。

ご清聴ありがとうございました。

- (注1) パワーバランスに関して言えば、若泉先生は自著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』の中で、アメリカの国際政治学者、F・シューマンの説を極めて重視し、次のように引用・紹介している。「生存は生命の第一法則であるから、外交官の第一の義務は国家の安全の増進である。その達成に要求されるのは、力の均衡維持についての配慮である。時代と事情のいかんを問わず安全はパワーにかかっており、パワーは必要ときに軍事力に表されない限り無力である」
- (注2) 共同通信によれば、各国の世論調査機関が加盟する「WIN - ギャラップ・インターナショナル」(本部 スイス・チューリッヒ) が今年3月に発表した国際世論調査では、「自国のために戦う意思」があるか否かについて、64カ国・地域で実施した世論調査結果によると、日本が11%で最低だった。次いで低いのはオランダ15%、同じ第2次大戦敗戦国のドイツ18%、イタリア(20%)。最高はモロッコとフィジーの94%。パキスタンとベトナムが共に89%。他の主要国は中国71%、ロシア59%、米国44%、韓国42%、フランス29%など。質問は「あなたの国が戦争に巻き込まれたら進んで戦うか」で「はい」と答えた人の割合は、世界全体では男性が67%、女性は52%だった。調査は昨年9~12月に計約6万2千人を対象に実施した。

パネルディスカッション前半 (発題)

司 会：京都産業大学名誉教授、モラロジー研究所教授	所 功氏
パネリスト：一般財団法人平和・安全保障研究所理事長、元防衛大学校長	西原 正氏
ジャーナリスト、元産経新聞政治部編集委員	佐伯 浩明氏
京都産業大学世界問題研究所長	東郷 和彦氏
京都産業大学五期卒業生	吉村 信二氏

所 失礼いたします。本当に暑期中、たくさんの方にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。本日は大城学長の開会ご挨拶にもありまして、今年創立50周年を迎える京都産業大学に最も早く設立された世界問題研究所の主催でございます。私も京産大に31年ほど奉職いたしました。もう一つは、3年前の定年後、このモラロジー研究所に奉職しております。そのような関係で、京産大の同窓生、特に関東支部の加藤康成さんがこちらへ何度も来られて、何とか若泉先生の再発見をしたいという企画を語られました。私は現在両方に関係しておりますので、それを少しでも応援することができればと思い、京都産業大学の関係者とモラロジー研究所の関係者に連絡をとる仲立ちをしてきました。幸い熱意ある皆さんのおかげで、こういう会が持てるに至りましたことを嬉しく思っております。

先ほど佐伯先生から大変熱のこもった、琴線に触れるお話をいただきました。それを受けて、これから1時間半余りディスカッションをしたいと思います。

最初に、まず西原先生から 20 分ほど、ついで東郷先生から 20 分ほどお話をいただきます。さらに三番手として卒業生の吉村さんから 10 分ほどお話をいただきます。大体そんな流れでお三方から発題をいただきました後、佐伯先生を含めて四方から、それぞれ少し言い足りなかったとか、ほかの方の発言について感想や意見を相互にお話ししたいと思っています。

さらに、会場の皆さんから先ほど貴重なご質問をいただきまして、ありがとうございます*。既にお出しいただいた分につきましては、それぞれの先生に渡っておりますので、これからのご発言の中で触れていただくこともありますし、そうでなければ後でまた補って答えていただくということになります。

では、まず西原先生から順番に補足や感想をお話し願います。

※基調講演とパネルディスカッションの間にオーディエンスから質問票を回収

「日本の安保政策の形成と若泉敬先生」

一般財団法人平和・安全保障研究所理事長、元防衛大学校長

西 原 正

Formation of Japan's Security Policy and Professor Kei Wakaizumi

Masashi NISHIHARA

本日はこの立派なシンポジウムにお招きいただきまして、京都産業大学に感謝を申し上げたいと思います。

まず、私がいただいたテーマですけれども、日本の安全保障政策の形成において若泉先生はどのような貢献、役割を果たされたかという点でございますので、その点に集中してお話ししたいと思います。そこに入る前に、私の若泉先生との個人的なつながりについて、少しでも述べさせていただきたいと思っております。

若泉先生とのエピソード

私が京都産業大学に就職したのは1973年でございます。したがって、そのころには若泉先生は東京の世界問題研究所にいらっしゃいましたから、私がお会いする機会は非常に少なかった。と同時に、私は東京へ行く機会もありましたけれども、お会いする機会はありませんでした。お会いいたしましたのは、京都産業大学に私がおりました4年間の最後の1年半ぐらいだったでしょうか。世界問題研究所が主催された学内の研究会というのがありまして、2か月に1回ぐらい会合いたしました。たしか世界秩序に関する研究会でしたけれども、若泉先生は東京からそのために来られて、研究会の主宰者をしていらっしゃいました。それが私のお会いした初めての機会です。

私の若泉先生に対する印象は、エネルギッシュであると同時に神経質な方だなというものでした。会議が始まりますと、研究会ですからすぐにテーマに入ってもいいのですけれども、若泉先生はまず最初に、この会合をするに当たって「こういう方にお世話になっています」「最近こういう方に会いましたけれども、こういうことを言っておられました。そしてこれは私にとって大変こうこうこうです」というご説明といましようか、挨拶といましようか、お礼といましようか、そういうのに30分ぐらいかかって、会合がよく遅れていたのを覚えております。

その後、私は京都産業大学を出て防衛大学に移り、若泉先生と再会しました。1992年の5月のことです。今日のお話の中心の沖縄交渉の済んだ後、沖縄返還の20周年記念というのがホテルオークラ東京でございました。その際に私も呼ばれてシンポジウムに参加したのですけれども、若泉先生は福井からわざわざこのためにオブザーバーとして参加されました。そのときには恐らく『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』という本を書いておられたのだらうと思いますけれども、会議の最中に司会者の方が若泉先生に向かって、「沖縄返還についてのいろんな噂がありますけれども、ここで少し話をしてください」とおっしゃいました。若泉先生はそれを聞いてじっとしていらして、みんなもシーンとしたのです。しばらくして、カバンから何かを出されたのです。それは大学ノートのようなものでした。そしてノートを少しめくり、また静かに見ていらしたのですけれども、英語で「ニーザー・ディナイ・ノア・コンフォーム」、「否定も肯定もいたしません」ということを言われたのです。しかもそれだけ。やおら大学ノートを閉じられまして、それをまたカバンに入れられて、そのままにいられました。みんなはあっけにとられていたのですけれども、そのときはまだ沖縄交渉について自分は何もしゃべるつもりはないということを強く決意していらしたのでしょうか。その後、その有名な本が出ましたから、私はいつもそのことを思い出して、92年の段階で若泉先生が何を考えていらしたのだろうか、ということに思い至っておりました。

若泉先生に影響を与えた出来事

本題に入りまして、若泉先生は「国際政治学者」若泉敬というふうによく言及されるのですが、私の印象では、それほど国際政治学者ではなかった。むしろ国際政治に関しての政策について、日本のあり方についていつも議論し、考えていた人であるという気がするのです。先ほどの佐伯さんのお話にもありましたように、日本の将来を考える際に「日本がどうあるべきか」ということを最初から、大学生の時代から考えていた人だと思います。そして左翼の学生運動が強かったときに、毎日新聞に寄稿いたしましたして、左翼の暴力ということについて非難する論文を書かれました。非常に勇気の要ることだったと思いますし、その原稿を書くに当たっては左翼のグループからいろんな批判を受けるだろう、あるいはそういう忠告を受けたのだらうと思いますが、左翼グループから硫酸瓶攻撃を受けることを想定され、それに備えて中和剤の苛性ソーダを常時携行しておられたというふうに言われています。既に、それぐらいに慎重かつ非常に身の危険を感じながら、大学時代から議論を進めていらしたということがわかると思います。

東大を卒業されたのは1954年ですけれども、その後、保安研修所、今の防衛研修所に教官として入られました。当時左翼思想が強かった日本において、学生が卒業して保守的な保安研修所に入ること自体、大変珍しかったと思いますが、やはり土曜会のメンバー、あるいは土曜会を通して親交を深められた矢部貞治先生、佐伯さんのご尊父である佐伯喜一先生、それから佐々淳行、矢崎新二といったような方々との親交がそういう思想の形成に貢献したというふうに思います。

防衛研修所にいらしたのは大体12年間ですが、その間にロンドンに2年、そしてワシントンに1年間留学をしていらっしゃいます。この間にイギリスの国防政策、特に「イギリス自身が非常に現実的で、核を持っていて、核廃絶ではなくて抑止のために使うべきである。同時にまた核を無くせばかえって通常兵器による緊張が生じて戦争になりやすい。したがって、通常戦争による紛争を避けるためにも核が抑止の働きをすべきだ。」ということを早くからイギリスから学んで、その思想を固めていかれたというふうに思います。アメリカ・ワシントンのジョンズ・ホプキンス大学に行かれたときにも、学者として図書館にこもって研究するというような姿ではなくて、大学のポスト客員研究員だったと思いますけれども、その立場を通していろんな人と親交を深められました。後にアメリカの駐日大使になられるマイク・マンズフィールド上院議員、そしてディーン・アチソン、ウォルト・ロストウ、ウォルター・リップマンというような人々ともおつき合いを深めました。そのことは後に中央公論で「オピニオンリーダー会見記」として連載をされました。これがご本人を若くして、30代で有名にさせることになりました。ワシントン滞在では、アメリカの核戦略、中国の軍事政策、そして日本の安全保障政策について思索を続けられました。そして64年の中国による核実験が先生に大きなインパクトを与えたと考えられます。この思索の結果は中国の核実験の2年後の1966年、中

央公論2月号に「中国の核武装と日本の安全保障」という論文を出されたことでも分かると思います。

沖縄返還と核問題

若泉先生の核問題についての立場は、中国が核武装しても日本は核武装の道を選ぶべきではない。非核の道、しかし同時に、日本には力がないのであるから当分の間はアメリカへの依存を深めておかななくてはならないということで、日米同盟の重要性を感じていらっしゃいました。それは現在の日本の姿と一応似ているというふうに考えていいと思います。

この核の問題に関しましては、66年の9月に、若泉先生は佐藤首相に対して核軍縮平和外交というのを提案していらっしゃいます。したがって、その翌年、67年の12月に佐藤首相が非核三原則を発表されたことに対しては、私は少なからぬ若泉先生の影響があったと考えております。

沖縄問題です。これは後に出ますから私はそのことについてはほんの一言だけ申し上げたいと思いますが、沖縄の返還と同時に核をどうするかという問題です。1969年の1月に沖縄基地問題研究会の「日米京都会議」という会合がありました。ここにも若泉先生は一参加者としておられ、そしていわゆる「核抜き本土並み」という結論がこの会合で出てきたのですけれども、若泉先生はそのことを十分に認識して、その後の対米交渉に当たられたというふうに感じております。だからこそ秘密外交にせざるを得なかったということになります。

若泉先生の国際問題に対する認識

結論としまして、若泉先生は国際問題を深く大きな立場、すなわち米ソ関係、米中関係という中で捉えておられましたし、そしてまた、日本の外交は基本的にもっと自主的な外交をすべきであるということ強く感じておられたと思います。それは先ほどのお話でもそういう指摘がございましたけれども、同時に日本の力がまだ弱いことも十分認識されて、防衛の分野に関しては、当分は日米同盟、対米に依存せざるを得ないということ強く感じられたと思います。同時に、国際政治学を私もやっているのですけれども、我々と違う点は、若くして日本のあり方というところから外交政策を書いて、そしてそれを高いレベルの人と友達になって、人脈をつくって自分の影響力を及ぼそうとしていた。我々学者はできればそういうことをしたいのですけれども、若泉先生はそれを実践された方であるという面では非常に違った方でいらっしゃいます。大変ユニークな日本を代表するオピニオンリーダーでもいらしたということになります。

中国に対しては非常に厳しく当たっておられたと思います。同時にまた、隣国である中国との関係は悪くしてはまずい。あるいはまたロシア、ソ連との関係も悪くしてはまずいということで、そこか

ら全方位外交という考え方が出てきたのだらうと思います。しかし、一番関心があったのは、日本の外交をどうすべきか、ということの中で、日本がもっと自主的にやらなければいけないということを感じておられたのではないか。それがまた対沖縄交渉で行った秘密外交の中での悩みでもあったのではないか、というふうに感じておりました。

若泉先生は、30歳代でインド、ビルマ、英国、米国、ロシア、あるいは中国などを旅行しまして、内外人脈をつくり、内外で注目される学者に非常に努力をして会われました。この人脈を築いた努力というのはちょっとほかの日本人にはないことであります。

最後にもう1点、これまであまり挙げられていないことがあります。若泉先生は防衛研修所にいながら国際問題を考えていましたが、先生はそのころ防衛研修所をやめて国会議員になることを考えていらっしやいました。しかし、京都産業大学に招かれるようになってから、このアイデアを断念いたします。したがって、若泉先生が政治家にならなかったのは世界問題研究所の責任でもあるわけです。今ごろそういうことを言ったってしょうがないのですけれども、そういう経緯だというふうに私は感じます。しかし、世界問題研究所での役割の大きさを考えますと、やはりその道を選ばれたのは非常によかったのではないかと。非常にユニークな日本人であり、また京都産業大学に対する大きな貢献をされた方であるというふうに思います。

どうもありがとうございました。

「日米交渉外交官としての若泉敬先生」

本学世界問題研究所長

東 郷 和 彦

Professor Kei Wakaizumi as a Diplomat-Negotiator in Japan-U.S. Negotiations

Kazuhiko TOGO

佐伯先生のすばらしい基調講演と今、コメントがございまして、私のほうは余り申し上げることが

なくなってしまったように思いますけれども、日米交渉、つまり若泉先生が参画された1969年の佐藤・ニクソン共同声明の交渉のお話を中心として申し上げます。

その交渉をやったのがたまたま私の父である東郷文彦でした。東郷文彦が北米局長として外務省の事務方を代表して佐藤総理に対する責任を持って交渉しました。若泉先生はこの交渉の密使として裏の交渉をした。ですから、佐藤総理がいて、東郷文彦がいて、若泉敬がいた、ある種の三角関係の交渉をしておりましたので、そのお話を今日しなければ私の責任を果たせないと思ひまして、準備しました。このテーマをお引き受けしたときに、やはり私としてこのテーマに対してできるだけ誠実に、今日、皆様に私として申し上げられる本音、一番言うべきことを言わなくてはいけないと思ひました。しかし、申し上げるまでもないのですが、これは結構難しい。ですが、私の申し上げられる限り、できる限り率直に申し上げたいと思ひます。

戦後日本の対外交渉の特質

その前に、この交渉が置かれていた位置、あるいは戦後の日本の外交交渉というものがどういうことであったかということについて、ちょっと私の意見を申し上げさせていただきます。国際関係の均衡というのは、佐伯先生も何度もおっしゃいましたけれども、基本的には力と力とのバランスによって平和というのが保たれる。ところが、日本は1945年に壊滅的な敗北を帰した結果、もちろん日本の政府はそれなりに力の均衡には気を使っておりましたけれども、自分で力を行使することによって外交交渉をやっていくというオプションはやめました。

やめた結果、では交渉を進めていくときに何が大事になるかとなりますと、これは利益、それから信頼、この2つだったと思ひます。利益というのは、要するに相手国と交渉するときにはそれぞれの国益というのがあるわけですので、その国益と国益がぶつかったところで一番いいところを持ってくる。それと同時に、佐伯先生のお話にありました松谷先生がおっしゃられたという交渉における人間同士の信頼関係、これは本当に重要だと思ひます。私も外務省で仕事をしていた間、それから今日お話しする色々な先輩の交渉を見て、本当にこれは重要だと思ひます。日本の戦後の大きな交渉というのはこの2つをベクトルにして動いてきたわけで、今日取り上げられている大きな問題で言いますと、沖縄返還交渉は利益と人間同士、つまり交渉当事者の信頼関係、これは表チャンネル・裏チャンネル含めて、これが非常にうまくいった結果、いい結果が出たという交渉だったと思ひます。これに比べて涙が出るほど悲しいのは、私がずっとやってまいりました北方領土交渉、これは要するに力がないですから、利益のバランス、それから交渉当事者の信頼関係だけでやってきて、その結果うまくいっていないのです。ただいま現在、壊滅状況です。

ところが、もう一つ、戦後の日本で僕らが本当に考えなければならず、これと違ったベクトルが

入ってきたと思うのは、やっぱり 2012 年 9 月以降の尖閣が入ってきた後の日中交渉です。このときに初めて力の行使というものが外交と直結するという状況に入ってきております。これは非常に新しい状況なので、中国との関係で抑止と対話というのを組み合わせて、日本全部が取り上げていかなくてはいけない交渉という時代になったと思います。

1960 年代の沖縄をとりまく内外情勢

そこで、お話しする沖縄を取り巻く国際情勢と日米関係、これは 1960 年代後半の話であります。今から思いますと、ある意味で幸せな時代だった。つまり利益と信頼によって物事が動いた時代だったのです。しかし、それが動くに当たっては大変な苦勞があったわけです。どういう時代だったかといいますと、ちょっとご記憶を新たにさせていただきたいのですけれども、これは米国とソ連の冷戦の時代であります。アメリカの置かれた状況は、第 1 に、60 年代後半、ベトナムの泥沼です。これから何とか抜け出さなくてはならない。それからアメリカの世界情勢の中における位置がだんだん弱くなって、相対的に小さくなってきている。そのときに世界情勢の根幹を揺るがしていた問題が中ソ対立、69 年春に中国とソ連は国境戦争で本当に場合によっては核戦争になるような戦争をしていた。この中ソ対立、この状況を見て、やっぱりアメリカはすごかった。ニクソン、キッシンジャーが打ち出したのが、1960 年代後半のまだ文革で国内的に大変な犠牲者をだしている毛沢東とアメリカが手を結ぶということ。これによってソ連を驚かせて、核兵器交渉でソ連を押し込む。両方押し込んだところで、中国とソ連の圧力を使って、ベトナムに影響を行使して、アメリカの名誉ある撤退を実現する。その中で、アメリカの新しい世界的地位をよりアメリカに有利に展開するために日本を使っていく。日本がもっと大きな役割を果たす。そのために沖縄を返してもいいのではないかという視点がアメリカに出てきたわけです。ただし、条件があって、ベトナム戦争が続いている最中ですから、それは国際情勢の中で受け入れられるものでないかという厳しい条件で交渉が始まっていくわけです。

片や日本はどうかというと、佐藤総理が出てこられて、65 年に日韓の正常化ということをやった。これは佐藤総理の最初の大きな成果です。日韓の正常化交渉をやって、次に今日お話があったように戦後を終わらせる。戦後を終わらせるためには、何としてでも沖縄の返還を実現しないかということで、日本のそういう思惑とアメリカの思惑が一致したところで交渉が始まったわけです。

沖縄返還交渉の表の合意

さて、交渉が始まって、まず一番難しい問題として、どういう段取りをするかということです。こ

これは67年の佐藤・ジョンソン共同声明で「両3年以内に返還の時期を決める」ということを言った。実は若泉ミッションもこの佐藤・ジョンソンのときから動いていて、父も北米局長をやっている、北米局長のほうで最後にまとまった案と若泉密使でまとまった案とちょっとした違いがあって、若泉先生は大変不満だった。ですけれども、この「両3年以内に返還時期を決める」という合意ができて、そこで今日のお話の本番の核兵器をどうするかということになってきたわけであります。

それで、69年の佐藤訪米に向かって、まず外務省の表チャンネルで交渉が動きました。その表チャンネルで動いた交渉の大筋は、有名な佐藤・ニクソン共同声明第8項に書いた案文にまとまっていくのです。「総理大臣は、核兵器に対する日本国民の特殊な感情およびこれを背景とする日本政府の政策について詳細に説明した。これに対し、大統領は、深い理解を示し、日米安保条約の事前協議制度に関する米国政府の立場を害することなく、沖縄の返還を、右の日本政府の政策に背馳しないよう実施する旨を総理大臣に確約した。」という合意案です。要するに総理大臣は、日本の核兵器に関する特殊感情、つまり非核三原則の考えを説明した。大統領はこれに深い理解を示して、「沖縄の返還を右の日本政府の政策に背馳しないよう実施する旨を総理大臣に確約した」。これが何を意味しているかと言うと、その交渉をやっていたときに沖縄には核兵器はあったわけですから、それと矛盾しないように返還をするということは、一回核兵器を外すということです。沖縄にある核兵器を外すという約束、これは単純なのですけれども、今、申し上げたようにベトナム戦争が動いているときですから、もう一回ベトナムで大変なことが起きて核兵器を持ち込もうとしたときにどうするかということが問題となります。

そこで、この再持込みの可能性に関して表の交渉で出てきたのが「日米安保条約の事前協議制度に関する米国政府の立場を害することなく」というものです。私の大学の講義で学生に意味はわかるかと言うと、ほとんどわからないと言います。私にとってもなかなかわかりにくい。父の書いた本などを読みますと、この意味するところは、「もう一回アメリカが日本に核兵器を持ち込みたいと思ったときは日本政府のところに来て、日本政府の皆さん、もう一回こういう状況ですから持ち込みたいですよ。」と言うのが事前協議です。60年の安保改定で付け加わったその事前協議をしたときに「アメリカとしては少なくとも日本はそれに対して最初からノーと言ってくれるなよ。そのときイエスもあればノーもある、そのアメリカのポジションだけは日本は理解して否定しないでくださいよ。」というのが大体の解釈で、そういうことで交渉が進んでいったのだと思います。

核兵器問題をめぐる交渉の実情

ところが、東郷文彦の立場からすると、11月、秋ぐらいからちょっと変なことが起き出しました。この案文は外務省の条約局の衆知を集めてつくった日本政府のとおきの案文で、それをアメリカ

にぶつけるのですけれども、ある時点から返事が来なくなりました。父の残した記録の中で、総理大臣を送り出したときにこの案文でアメリカ側と最終的にまとまるかについての見通しが立たない。そういう状況で総理を送り出すのは非常に心苦しいという状況になるのです。父は、1982年に書いた『日米外交30年』と言う回顧録で、この心苦しさを書いています。今、私たちにはそれがなぜかというのはよくわかっています。私はこのメモワールだけでは、第8項の案文の交渉でなぜこういう心苦しさが出てきたのかよくわかりませんでした。岡田外務大臣のときに文書が全部開示されて、よくわかりました。

例えば、若泉先生が入っておられたことによって一つ不思議なことが起こりました。それは英語と日本語の乖離が起きるのです。若泉先生がつくった英語、最後に交渉した英語は若泉先生1人しか持っていなかった。外務省の事務方のもっていた英語案文との間にちょっとした乖離が起きて、最後の晩、日本代表団の泊まっていた迎賓館でドタバタが起きて、日本語と英語がセットされて、この第8項と英語の文がピタッと合う。これは今となっては笑い話で済む話、よかったのではないかと思います。

でも、申し上げるまでもなく、裏でもう一つ紙が動いています。それがお話のあった秘密合意議事録で、エッセンスは、核再持込みの要請がアメリカからあったときには、“The Government of Japan, appreciating the United States Government’s requirements in time of great emergency stated above by the President, will meet these requirements without delay when such prior consultation takes place.” という約束部分ですね。要するにアメリカが核兵器の再持込みを事前協議で求めてきたら、日本の総理は、“will meet this requirement without delay”、つまり、「遅滞なくそれを実施しますよ」という合意議事録ができていたわけでありませう。

そこで、文章が開示されるまで僕も全然知らなかったのは、では外務省の事務当局はこの表の第8項が合意されればそれで全部終わると思っていたかということ、やっぱりそれはプロの外交官として、「終わらないかもしれない。終わらないとなったときに、総理を裸にするわけにいかない」という準備をしていたのです。その準備をしていたときにつくっていた文章というのが使われなかった総理発言。これが文書公開で出てきて、同じ外務省に勤務して、これはやっぱり皆さん努力をしていたなと思った文章でありまして、要するにもし核兵器を入れたいと言ってきたときに、その時点の69年の佐藤総理として未来のことに對して何が言えるかということとをぎりぎり国民感情なんかも踏まえて矛盾しないようにして発言するには、こういうふうには言ったらいいのではないかと、という文章です。そういう状況が将来起きたときは、「もっとも国のいかなる政策といえども、どのような場合でも再検討の余地がないというほど固定されるものではありません。いわんや万一日本自身の安全がかかっている事態が生じた場合には、核兵器の導入に対する政策を含む日本の防衛政策全般が慎重に再検討されなくてはならないでありませう。あなたが言及された米国の行動に関する事前協議に対する日本

政府の回答は、そのときの情勢を十分考慮に置いてなされるべき、前述の再検討の結果に照らして行われるであらう」と言う文章です。これは外務省の条約局や事務方が書く典型的な文章で、必ずしもわかりやすくはないですけれども、要するに将来政策の変更の余地があるのですよということを、絶対政策を変更するということを言わないで、ぎりぎり表現したという苦心策であります。

さて、ここでもう一つ問題があります。第8項の表の合意だけで収まったか、それともやっぱり収まったのは秘密合意議事録があったからなのか。これは正直申し上げて分かりません。分かりませんが、少なくとも合意議事録があったことによって収まった。もしかしたら合意議事録がなかったら収まらなかったかもしれないという理由はあるのです。なぜかという、当時アメリカの軍はもし本当に危ない状況になってきたら、核兵器をもう一回配置させてくれという意向は非常に強かった。そのアメリカの軍がこの言葉で収まったのかもしれない。その真偽を証明することはできませんが、とにかく合意議事録でもって収めたことをよしとして、その後の歴史を私たちは受け継いでいく必要があると思います。

ただ、東郷文彦と若泉との関係では、ちょっとまだ幾つか理解しておきたい点があるので、解けない疑問として幾つか問題を出してみます。

まず、東郷は密使の存在を知っていたか。確実にイエスだと思います。父の書いたものを読んだときはちょっとよくわかりませんでした。しかし、文書公開によって出てきた文書、東郷文彦というのは外務省の中でもメモ魔だったのです。外務省の中でも記録を残す人はいますけれども、特に安保課長のときの安保の改定交渉とこの沖縄の核兵器交渉についてはものすごくたくさんメモが残っている。それを全部読むと、特に英語テキストの問題で誰が作ったか分からない英語が出てきたというはっきりした記述がある。そのことが分かっている、誰もいなかったということはありません。したがって、密使の存在は知っていた。

東郷は密使の役割を何と認識していたか。私は密使の役割というのはこの第8項、表のこの文章を固めるためにいたのだと思っていて、裏についてはありません。父の性格からして、もし合意議事録のようなものをその密使の人が担当していたことを知っていたのだとしたら、ちょっとものの言い方は違っていたと思うのです。しかし、回顧録の中で書いているものの中で、佐藤総理に対しても、あるいはこの「ヨシダ」なる密使に対しても全く悪気がないというか、非常に明るい態度で書いているのです。だから、まさか合意議事録のようなものができたとは思っていなかったと思うのです。

沖縄に対する東郷・若泉の思い

しかし、一番問題なのは、東郷が秘密合意議事録作成という密使の本分を知っていたらその内容に

賛成しただろうか。これについて、私がこれから申し上げる答えには確信があります。それはどこで確信があるかという父の書いた『日米外交30年』にあります。そもそも交渉の基本方針は核抜き本土並みだった。つまり日本が沖縄を取り返す以上、核を抜いた本土並みの条件として取り返すということが日本政府の大政策になります。ところが、その核抜き本土並みという政策が決まる前には、いろんな議論があったのです。それについて父の書いていることなのですけれども、「核抜き本土並みは結構であるが、沖縄返還はしょせん極東の国際情勢の中での一環として運ばれるところである。そこで、核抜き本土並みの前に、仮に本土並みでないにしても復帰を実現したほうがいいのか、あるいは本土並みでないなら復帰を待ったほうがいいのかという問題があるのである。この問題についての腹構えなしに、ただ核抜き土並みを呼号するだけではアメリカとの間の交渉に力が入らない。また、せっかく安保条約を改定しながら、沖縄は日米双方で合意する条約区域には含ませず、沖縄が核つきならば返還されないほうがいいのかというのでは、沖縄の人たちから見れば本土のほうは余りに身勝手ではないか。私は復帰第一で対処しなければならないと考えている」。

この主張を父がしたのは1969年、このことを本に書いて残したのが1982年、これはある意味で驚くべきことだと思うのです。ここで言っていることは、本土と沖縄との関係で、沖縄には核兵器があります。核兵器のついている沖縄なら日本に返ってこないほうがいいのか、それでいいのか。今日は沖縄の東京事務所の代表の方に来ていただいているはずなのですが、それ以外の方、ほとんど本土の方は、私も含めてそうですが、これはもう一回僕らはそのときに戻って考えるに値することだと思います。沖縄に核兵器がある、その核兵器がどうしても外せない。外せないなら沖縄は日本に取り戻さなくていいのか。それとも核兵器がついていても、とにかく取り返すことのほうが大事なのか。父は非常にはっきりと、ついているままでも取り返したほうがいいのかということを書いているのです。そこで、その立場からすれば、一朝事があったら核兵器を入れる、反対する理由は絶対がない。これは外務省のコンセンサスかどうかわかりません。しかし、父の立場からすれば、合意議事録に書いたことについて全く反対の意見はなかったと確信しています。

そこで最後に、私たちの問いかけですけれども、若泉と東郷は沖縄の現状をどう見るか。大変難しい問題であり、とりあえずはこういうことについて私は2年前の京産大の『産大法学』に1本だけ論文を書きました。その最後にこの問題を自分に問いかけました。

「さて、沖縄である。東郷にとっても若泉にとっても、現在の沖縄の状況は、天を仰いで涙する悲痛なものであるに違いない。それぞれが心血を注いだ沖縄の返還を実現しながら、返還から40年たった今、これほどに沖縄と本土の人と心が離れてしまったことに対する悲しみと怒りは、耐えがたいものであるに違いない」

「具体策は、日本自身の防衛力の増大による米軍基地の縮小と、沖縄のこれまでの負担をあらゆる角度から本土が引き受けること」によって今後の政策を成り立たせるしかないのではないか。まだ幾つかありますけれども、とりあえずここで終わります。

「京都産業大学における若泉敬先生」

京都産業大学 五期卒業生

吉村 信二

Professor Kei Wakaizumi at Kyoto Sangyo University

Shinji YOSHIMURA

京都から参りました吉村信二です。限られた時間ということで、語り尽くせぬことは沢山ありますが、どうぞよろしくおつき合い願えたら幸いです。そして、会場の皆さんに配付させていただきました、私からの小冊子『若泉敬先生に学ぶ』をご覧下されば嬉しゅうございます。

実は若泉先生の『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』に関しては、発刊とか出版ではなく、あくまでも「公刊」という言葉を大事になさっていました。その「公刊」（平成6年5月15日）の二ヵ月ほど前に、先生のほうから一度鯖江へ来てくれないかということで参りました。その日は泊まる約束をしていたのですけれども、たくさんの原稿をドカンと持ってきてまして、これを読んで欲しいと申されました。

拝読するに、先生の一大決心を私なりに感じたことが、昨日のように思い出されてなりません。

そのときに先生がにこっと笑いながら「吉村さんよ、せっかく来てくれたんだから、僕の大事にしていたものを幾つかあなたに差し上げようと思って用意したんだ」ということで、愛用の腕時計を頂きました。これはニクソン大統領の補佐官だったキッシンジャーさんと丁々発止の外交交渉をやりましたときの時計です。それから、先生は100通近いお手紙をくださったのですけれども、これも差し上げるよということで使い慣れたモンブランの万年筆です。それからもう一つはメガネです。

今日はこの会場にも一般の方々や卒業生の皆さんをはじめ、メディアの方とか、学者の皆さんとか、警咳に接した方々が大勢いらっしゃるわけです。僕は先生がこの会場にいて、にこにこしながら、佐

伯先生、西原先生、東郷先生の話、もちろん所先生の話をお聞きになっていると思いますので、こうして先生のメガネをかけます。

僕には後ろに先生がいらっしゃり、背中を押してくださっているという気持ちで、この時計も腕にはめさせていただきます。

若泉先生から若者へのメッセージ

まずは、私自身がイガグリ頭の福井県の若狭高校3年生のときに若泉先生との出会いがあったということについて。ちょうどこの時期というのは、先ほどもご案内がありましたように日米京都会議、正確には「沖縄およびアジアに関する日米京都会議」というのですね。西暦でいうと1969年です。和暦でいうと昭和44年の1月28日から31日の間に国立京都国際会館で行われるのです。これがその後の沖縄返還の「対米交渉前哨戦」です。

そのとき僕は先生にお手紙を出しておいたのですけれども、ご返信をいただきました。福井に立ち寄るから、ちょっと武生で会おうねということで、奥様のひな様のご実家でお会いさせていただいたことが、初対面でございました。

なお、ひな様奥様は若泉先生と福井師範学校で一緒され、明治大学に学び、福井県最初の女性弁護士でいらっしゃったお方なんです。

若泉先生は本当に何か目の澄んだお方で、「仁なる眼差し」は深い感激となって、生涯忘れることができません……と僕はこの小冊子で表現をしています。(京都産業大学は)本当に新しい大学だけど、共に学び共にこの大学を日本の、世界の冠たる大学にしていこう、そういうお誘いをいただいたことが僕の原点であり、初発であったわけです。

そういうことで、京都産業大学に入学し、学生寮とか自治会活動にも励みました。卒業と同時に母校に奉職させていただいて36年、本当に長い間、僕は皆さんに鍛えられ、助けられ、そして多くの皆さんに導いていただいたわけでございます。

まさしく「知の奔流・教育の道場」を纜(ともづな)に、「運命共同体」として学生、教職員と共に大学の進運に夢を抱き、汗を流してきたんだと思います。

先生は確かに国際政治学者でございましたけれども、僕にとっては慈父であり、そして僕と家族を終生愛してくださったということで、まさしく「人生の師表」でございます。

「日本の次代を担う青年には、毅然とした自主独立の精神をもって、我が人生、いかに生きべきか」を自問する。この言葉は先生の口癖でした。

若泉先生は若い学生さんたちに、そのおもいを繰り返してお伝えされたのです。

昭和55年3月29日、先生は50歳の誕生日に、東京から郷里の福井県にお帰りになって、鯖江市

に居を構えられます。

地元新聞の日刊福井の「正言」というコラムに何本もの論説をお出しになっています。そこでは教育者として「若い人たちに、頑張っただね」とエールを送っておられます。

それから私的なことで恐縮ですが、「正言」のなかで、「大学に合格したS君への手紙 — 人生の礎をつくる学生生活 —」という記事があります。これはもう時効で許していただけると思うのですが、先生が原稿用紙に手書きの生原稿を私に送ってきました。

「S君というのは君のことなのだ、信二君の気持ちで書いたから一回読んでくれ」と。僕は京都産業大学の新生に帰った気持ちで、拝読しました。

僕は一カ所だけ注文をつきました。記事の最後に「最後になって気づきましたが、学生の本分たる学問に励んでもらうことを、つい書き忘れるところでした。昔からよく学び、よく遊びといえますね。S君、大いに学生生活をエンジョイしてください」とありました。僕は「内村鑑三博士の善学善遊をお入れになったらどうですか」とお電話を入れました。「ちょっとこれは難しい言葉だから、よく学び、よく遊びにしようね」ということで終わりました。

若泉先生の日本に対する思い

先ほどフロアのほうからご質問をいただいておりますので、それにお答えさせていただきたいと存じます。このご質問は、恐らく卒業生さんからですね。あえて卒業生のよしみとして全文を拝読させていただきます。「ともすれば、沖縄返還の密使として活躍がクローズアップされている若泉敬先生ですが、教育者として京都産業大学の教授でありました。

当時は敗戦で大人は自国の歴史と文化には自信をなくし、若者は“戦争を知らない子どもたち”として、先の戦争については、知らなくても良いこととして、あえて目をそらすように教えられてきました。若泉先生は大学生に対して“何のために学ぶのか”、極論すれば“この人生をいかに生きるべきか”を伝えようとされていたのか」

「在学中ならびに卒業後も若泉先生と親交の深かった吉村さんにお話をいただけたら」ということですね。

僕は嬉しいんです。こういうご質問をいただいて「あっ」と思ったのですが、先生が唱えられた日本のあるべき姿ということを僕なりに集約しました。「現世に生きる生者は、死者の思いを忘れてはならない」という座標軸ですね。

それは、世界の中の日本、日本人は、日本の社会はどうあるべきか、そして若い人たちは勇を鼓して挑戦し、「我が人生、いかに生くべきか」を生涯にわたって問い続けてほしい、というところに行き着くと思っています。

結びに代えて — 若泉先生ご子息からのメッセージ —

若泉敬先生のご長子でいらっしゃる耕さん、改め聡一郎さんの赤心をば皆さんにお伝えしたいという気持ちから、会場の皆さんにご配付いたしました（A4版）6枚の「御礼の言葉」を預かってまいりました。シンポジウム開催に至った多くの方々のご努力に感謝しますということを聡一郎さんは、何度もおっしゃっています。

ここに、一部分をご紹介します。「諸事情がございまして、不肖の息子は出席させていただくこと能わず、非礼を拙文にておわびし、また深謝を申し上げさせていただくことをどうかお赦しください。苦しき逡巡の末に1980（昭和55）年3月29日、50歳の誕生日に、若泉は人生の一大決心をして、東京から郷里の福井に隠棲いたします」これは若泉聡一郎さんに先生がおっしゃった言葉なのですが、「ともかく一刻も早く、この時計を外したいんだ、と腕時計を引きはがすジェスチャーを私に示し、魑魅魍魎の棲む政治の世界から、なるべく自由でありたいと願った若泉でした」ということです。

そしてまた、聡一郎さんは、今、青山学院の大学院におりまして修士論文を作成中なのですけれども、杉浦勢之先生にご指導をいただいております。勢之先生のおじい様であります、石川栄耀博士が『戦場を弔う』という題で琉球歌をお詠みになっています。

ぜひこれも何かの縁でございしますので、この「御礼の言葉」の中からご覧いただけたらと存じます。

「末筆ながら、学校法人京都産業大学の首脳部の皆様方、学生の皆様方、とりわけ草創期の皆様方には、大変お世話になり、支えていただき、若泉敬を育てていただきました。心より深謝申し上げます。ありがとうございます。このシンポジウム開催実現に向けて大変なご準備等お務めいただきました、ご卒業生の加藤康成様、木野正博様、丹吾俊次様、三枝清様はじめ多くの皆様方から、粉骨砕身のご尽力を賜りました。ここに篤く篤くお礼を申し上げ、鳴謝の意を捧げます。まことにありがとうございます。ありがとうございました」ということで、若泉聡一郎さんの切々たるおもいの一端を述べさせていただきました。

これで、私の拙い発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション後半（議論）

「講演者と発題者の相互討論！」

所 それでは残された時間、基調講演をいただきました佐伯先生を初め、各発題者から、最前ちょっと言い足りないとか、あるいはほかの方の話を聞かれてこう思うというようなことを、

手短にお話し願います。

佐伯 それでは、手短に足りなかった点を申し上げます。

それは一つには、吉田総理のことなのですが、吉田総理が実は戦後のスタート時の政権を担ってきたのですが、ものすごい深謀遠慮の人だということです。沖縄に対するアメリカの統治を承認せざるを得なかったわけですが、これに対して日本側が用意したのがあります。それはサンフランシスコ講和会議のときに沖縄領有論すら出していたアメリカとの交渉で、日本側は沖縄、小笠原、樺太、千島などについて日本の固有の領土であることを説明した7冊の英文資料を用意して連合国側に渡した。これは若泉先生も指摘しているのです。すごく重要なことだと思います。後々こういうことが効いてくるというか、その賢明なこと、洞察力の深い指導者というのは重要なポイントを忘れないなと思います。アメリカに沖縄が占領されても、固有の領土である主権を、きちっとそういうところで主張されているわけです。

それからもう一つ、これは皆さまの質問の中にも出ているのですけれども「日本はもうだめなのじゃないか」というふうなご感想です。「日本は戦後体制から脱却できないのではないか。これはどう考えますか。」というご質問です。私は「駄目なことはないし、変えることはできる」と思っています。それはやはり何事も最初は1人なのです。1人の心の中から始まるわけです。「沖縄返還を絶対に成し遂げるのだ」という若泉先生の心の中に芽生えたものが、一波が万波を呼ぶわけです。しかし同時に、この志、行動を支える人も現れるわけです。それから、若泉さんと別のところで考えている方もいるわけです。それがあるとき出会う、いろいろ事態が変わっていくわけです。たった1人から始まっても、多くの方々の協力を得て成功に導かれる、というのが歴史の証明するところだと思います。

その中で、沖縄に関して述べたいことは、当時の条約課長で、後に最高裁判事の中島敏次郎さんが言っておられることなのですが「沖縄の返還交渉で大事な点が2つある。一つは、佐藤総理の決断だ。外交技術的に見れば必ずしも最適ではないときに蛮勇を振るって決断した政治的重み。それからもう一つが、米国がベトナム戦争で苦闘しているときに重要な基地を含む沖縄の返還が妥当だと決断した日米関係の将来を見据えた政治的演出だ」というふうに言っています。

もう一つ指摘するならば、この沖縄返還交渉に基地問題研究会の事務局長として、これをセッティングして前に進めた末次一郎先生という国士がいらっしゃった。末次先生は沖縄返還交渉の真っ盛りというか、準備段階の時期なのですが、昭和41年・1966年にアメリカに渡って、200人近い要人に会っています。その時に沖縄返還交渉の動きを始めているわけです。それから1年たった昭和42年・1967年に、今度は早稲田の総長をやられ、首相の諮問機関であ

る沖縄問題懇談会の座長を務めた大濱信泉先生と一緒に2人でアメリカを訪米している。このときは100人近くに会われたのです。この熱意というか、やはり若泉先生も末次先生の熱意に引っ張られたし、末次先生も若泉先生の熱意に引っ張られて、大濱先生も含めてお互いすごく強力な紐帯ができていくわけです。

その末次先生が言われていることでもう一つ大事なことは、反基地闘争です。今でも沖縄の米軍基地反対闘争が非常に盛んですが、「反基地闘争が米国の危機感を煽った。沖縄返還は佐藤内閣の功績とはいえ、社会党を含めて反基地闘争が梃になったことも特筆しなければならない」というふうに指摘しています。

末次先生も、若泉先生も今、自分が進めている政策に反対しているからと、その反対運動の人々のやっていることを全面否定するとか、そういう考え方ではない。片一方にそういう反対運動があって、「反対運動がアメリカを刺激して、最後の落としどころを沖縄返還に持っていった側面もある」、そういう認識の仕方です。若泉先生は対中国でも、ロシアあるいはソ連との関係にしても「決して和解のできない敵だ」という見方はされていないのです。

若泉先生が国際政治学者として名前が売れていた時に中国から招待があり、中国へ渡って、中国の若い安全保障の専門家、あるいはロシア、当時ソ連の安全保障の専門家、中にはもちろんKGBとか中国の情報部の人もいたと思うのですが、若泉先生は「日本のように情報部の人間をいつまでもスパイ視していたらだめだ。情報部に行く人間は最高にセンスの優れた、英知の深い人間が行くのだ。それが外国の実情ですよ。だから、彼らと交流して話をして、それで中国の若い専門家、ソ連の若い専門家と意見を交換して、お互いに胸襟を開いて話し合うことがものすごく大事だ。」というふうに言っておられました。「戦略上は敵対、敵視するかもしれないけれど、決してわかり合えない相手じゃない」という見方を終始崩さなかったのが若泉先生です。

所 ありがとうございます。それでは、続きまして西原先生、お願いいたします。

西原 どうもありがとうございます。今日は皆さんから大変貴重なお話を伺って、私も勉強になっております。ごく簡単に3つ申します。

一つは、東郷大使から伺った話なのですが、ここにいらっしゃる方はみんな若泉先生のファンでいらっしゃいますから、私がこれを言うと帰れなくなるのじゃないかという心配もあるのですが、あえて申しますと、研究者からすると、密使という役割・責任を本当に若泉先生は果たされたのかどうかという問題が残っています。密使というのは死ぬまで自分のやったことを言わないものです。だけでも本にされたというようなことで、これは密使としての役

割から外れているわけです。これ以上のことは申しません、帰れなくなるかもしれませんから。ですけども、一研究者として客観的に見るならば、この問題のこういうところをどういうふうに評価すべきかということは考えておくべきだというふうに私は思います。

もう一つ、いい点は、我々研究者にとっては立派な本を綿密に書いていただいたので、資料としての価値はうんとあるわけです。その点は、私は大いに評価したいというふうに思います。

いただいたご質問の中で2つばかり私のほうに向けられているものがございますので、簡単に申し上げます。

一つは、戦後の日本の歴史、いわゆる歴史認識ですけども、日本は日本できちんとした包括的な総括を政府としても国としてもやったらどうか、というご質問です。これは大変難しい問題で、一言で簡単に申し上げるのは大変難しいのですが、私は政府が総括するというのは無理だと思います。政権が変わり、指導者が変わり、指導責任者、首相のレベルの人の歴史感覚も違うし、歴史に対する理解も違うかもしれませんから、政府でもって決めるというのは大変難しいと思います。したがって、歴史の問題は政策から外れて、研究者の間でいろいろ議論する、マスコミその他を入れてもいいですけども、話して議論していくのがいい。そしてうんと時間はかかりますけれども、その間にお互いに理解ができるようになればいいと思います。例えば韓国の安重根という人は伊藤博文をやっつけたという面で英雄です。英雄と彼らは認識する。我々日本人から見ると彼は暗殺者という罪人です。これを一緒にして共通の歴史認識にしようなんて無理です。しかし、時間とともに韓国では立派な人だと考えております。日本人にとってはそうは思いませんね、というようなことが自然とどこか日本の歴史の本にも、学校の歴史の本にもあっさり書かれている。韓国のテキストにも書かれているということになれば、だんだんと私は歴史認識が縮まっていくものと思います。

もう一つの問題で、今、憲法改正の問題がありますが、若泉先生がもし生きていらしたらどうという見解をお持ちになるだろうかというご質問です。これも難しい問題です。安倍さんは、現在は9条を改正するという道を選ばずに、9条は集団的自衛権を認めているのだという解釈を変えたことによって新しい安保体制をつくろうとしています。ですから、9条より先にまず解釈を変えて、それで実行していく。これが正しいのか、憲法改正をまずやってからやるのかという問題はいまだに残っていますし、日本人の多くは安倍さんに対する支持率を低めている。その人たちの意見はやはり憲法改正を先にすることだだと思います。大変難しい問題ですけども、私自身は今の日本の置かれた国際情勢から言って、きちんとした自衛権の行使ができる体制を作っておかないと危ない。そのためには憲法解釈をまずできるところからやっていき、そして将来、機会があれば憲法改正によってそれがよりはっきりした形になればよりよくなるだろうと思っております。今、憲法改正をすると言ったって、9条の改正を近い将来でき

るとは私は思いません。したがって、憲法改正ができるまでそういうことをやりませんということを考えれば、日本の防衛はますます、安全保障関係ももちろん厳しくなってしまうというふうには私は考えております。

どうもありがとうございました。

所 ありがとうございました。佐伯先生も西原先生もフロアからのご質問に対してお答えいただいておりますので、東郷先生もご質問への回答を含めてコメントをお願いいたします。

東郷 いただいたご質問と今のお2人のコメントにちょっと言いたいことを加えます。

まずいただいた質問なのですが、これは本当に核心に触れる質問だと思います。「若泉先生が沖縄返還にあたっては外務省ルートよりも佐藤総理が直接ホワイトハウスを攻めたほうがよいと著作に書かれていたと思いますが、なぜ正規ルートよりも密使を使っての直接交渉がよかったのでしょうか」。申し上げたように、このときの情勢からすると、アメリカの中には国務省と軍と両方あって、アメリカの軍はもしもう一度核兵器を持ち込まなくてはならないときには必ず持ち込む保証を取れという非常に強い立場をとっていたわけです。そういう状況で密使がいなくて、先ほど私をご紹介した外務省の役人が知恵を絞って「ちょっとよく分からないけれどもとにかく分かってくれよ」という趣旨の文言で取まったのか、それとも本当に密使が必要で、かつその内容は外務省の正規のチャンネルだったらつくれなかったのか。明らかに非核三原則を否定しますし、外務省は秘密の文書を意図的につくるといことはしません。そうすると沖縄は帰ってこないということになりかねない。つまりそれは東郷文彦が最初に言った、そもそも核兵器つきの沖縄ならば、そういう沖縄は要らないと言うのか、核兵器つきでもとにかく取り返すのだということも最初の選択にはあった、核抜き本土並みということを決めてしまって、それでやるということをやってしまった以上、大変なジレンマを抱え込んだわけで、佐藤総理はそのときに裏のチャンネルを使ってでもやるという大決断をされたわけで、この決断をされたのは、さっきご紹介があったようにやっぱり佐藤総理という人の本当の腹というか、人間の大きさというか、英語の言葉で責任は自分がここでおさめるという有名な言葉がありますけれども、やっぱり総理大臣というのはそういうもので、そういうふう判断された。その意味がどこにあるかということは、それ以上ご説明できないということだと思います。

さて「沖縄の現状をどう見るか。辺野古基地が必要なのか。将来の基地のどのような形が理想的なのか」。まさに今、考えなくてはならない核心のご質問なのですが、一つ今の問題を考えるときに、多分若泉敬にしても、東郷文彦にしても、また今日の皆さんのお話の中で

も、佐伯先生がおっしゃったように歴史の流れの中でこの問題を考えなくてはならないということは本当にそう思うのです。したがって、これは沖縄の歴史というものの文脈の中で考えなくてはならない。そうすると、琉球王国というものがあって、それは半独立の立場で薩摩と当時の清のもとにあった。ところが、当時の日本帝国主義の力が台頭し、清が没落していく中で日本帝国の一部になった。しかし、それが戦争になったときに日本で唯一の本土決戦にさらされた場所になって、その後、米軍の施政権の長い時期があって、その施政権をようやく取り返した。その後40年ぐらいたったところで、米軍の基地の75%が引き続き沖縄にある。この歴史的経過ですね。その経過の中で、今の沖縄の民心というものが、独立とは言いませんけれども、ある種の沖縄のアイデンティティというものを表に出そうと思って真剣な模索をしている状況です。その中には例えば私が外務省で一緒に交渉していた佐藤優氏があります。ご案内だと思えますけれども、彼はお母さんが沖縄人。外務省をやめてから私も佐藤もロシア問題から若干離れて、佐藤のアイデンティティの問題というのはロシアのことよりは沖縄人としてのアイデンティティの問題に完全に思考が変わってきています。ああいう桁違いの知恵袋というか、そういう人がついた中で、今、沖縄の運動が起きている。この歴史的な変化を踏まえて考えなくてはならないと思います。

実は7月10日に『危機の外交』という本を出しました。これは首相談話、歴史認識、領土問題ということで、ここでさっき出てきたようなこと全てについて私の意見が書いてあるのですが、この本を出したときに、もう1章設けて「沖縄」という章を最初は書きたいと思ったのです。思ったのですけれども、佐藤からいろいろ聞いたりする中でも、今の私の勉強のレベルでは書けません。まだまだ勉強しないと書けないので、そのことはあとがきにお断りして、しかし、真摯に勉強を続けていって、このご質問に答えられるようになっていきたいと思っています。

そこで、西原先生が「密使、それは本来出してはいかん」とおっしゃいました。それはそうですが、この日本の歴史、戦後の日本外交を考えたときに、私は『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』という本を若泉先生が書いてくださったということは本当によかったと思っています。それは研究者としてももちろんあの本が出ていなかったら全く何も分からなかったというのもそうですが、やっぱり国民の知る権利というか、あれがなかったら本当に分からなかった。密使の役割は、もちろんそれは言わないということですが、だけでも、それを上回るいいことをやってくださったのではないかなと思っています。

それから、最後におっしゃったことで歴史認識について安重根のことをおっしゃいました。安重根という一つの問題に関しても、同じ日本人でも違った見方があるわけです。それはさっきほかならぬ佐伯先生がおっしゃった岡崎久彦さんが大変な勉強をして韓国に行かれて、その

後に『隣の国で考えたこと』という名著の中で4ページぐらいを使って安重根のことを書いているわけです。それで結論から言うと、安重根は立派な男だ、安重根は愛国者だ。岡崎さんが当時一緒に勤務したアメリカの同僚に、「安重根って知っているか」と聞いたら、あれはコリアンファナティックのテロリストだろうと言ったのです。彼は「とんでもない。歴史はまだまだ進歩しなくちゃいかん。お互いに勉強しなくちゃいかん。だから、そういうアメリカ人や日本人が安重根というのは立派な愛国者だということを分かるような時代になって初めて日韓関係がよくなる」と書いています。これは左のいわゆる親韓国派が言っているのではないのです。岡崎久彦さんです。私も安重根についてそれを読んで勉強して、やっぱり私もあの男は立派な男だと思うところがあるのです。ですから、そういうことはお互いに勉強することによって歴史認識の接近の度合いというものの余地というのがいろいろあると思うので、相手の立場に立って勉強するという努力を続けていかななくちゃいけないと思っています。

所 どんどん話が広がっていきますので、時間が気になるのですけれども、先生方の間でもお互いに議論されたいことがあるかと思われます。私から先に申し上げて済みませんが、いま東郷先生が言及された安重根は、いかに立派な人物であったとしても、伊藤総監を射殺した行為は日本人として容認することが出来ません。

また、素朴な疑問ですが、若泉先生は『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』を書かれましたが、もしキッシンジャーなりニクソンが何も書かなかったり言わなければ、密使という立場の先生は、これを書かれなかったのじゃないか。しかし、向こうの出した情報が正確でない、これでは後世誤解を与えるということで、あえて書かれたのじゃないか。それはどうでしょうか。

佐伯 それは佐藤総理の日記の中には、有事の際に沖縄への核持ち込みを可能とした日米首脳が取り交わした秘密合意議事録のくだりは一行も出てこないのです。ご本人は『佐藤日記』を読んで愕然とされている。歴代総理の国会答弁にも合意議事録の存在は全然出てこない。しかし、日本側もアメリカ側もそうだが、その中で、この大事な交渉が実際どういう形で行われたかということ国民のために歴史として残しておきたい。しかも、正確に残しておきたい、という願望があってこの本ができ上がったと理解しています。

所 わかりました。多分おっしゃるとおりだろうと思います。私も歴史家ですから、こういう正確な記録はぜひとも残してほしいと思います。今、おっしゃいましたように、アメリカ側も日本側も、表向き言われることは必ずしも真相そのものではなくて、オブラートに包んだり、当面はこういう言い方しかできないということに留まりますから、容易に真相が分からなくなり

ます。

例えば戦後まもなく行われた昭和天皇とマッカーサーとの会見なども、きちんとした記録を公表してほしいのですが、いろんな背景があつて、記録はあるけれども公表しないというふうなこともあるのです。しかし、その記録はいずれの日にか公表するため、用意はされなければならないと思います。そういう意味で、こういう詳細な記録を若泉先生が出された背景には大変な覚悟を要したと思われます。しかも、その胸中に、沖縄で亡くなった人々に対する思いがあつて、これはどうしても書いて公にせざるを得ないという、やむにやまれぬお気持ちがあつたのではないのでしょうか。

西原 私自身もそれは賛成です。彼はやむにやまれず、どうしていいかということを随分心痛されたと思います。最後にはそれを決心された。その点は私も同意です。

所 これは全く異例の本だと思います。皆さんご存じだと思いますけれども、最初に宣誓をされ、また鎮魂の献辞を掲げられる。生きている人々だけでなく、亡くなった方々に対して、自らの決意をまず掲げられ、その上で真相を述べておられます。これは後世に対する先生の責任を果たされたことになると思われませんが、この点、吉村さん、いかがでしょうか。

吉村 今、所先生がいみじくも申されたように、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』の巻頭部にあります「宣誓」の文言の中で、「永い遲疑逡巡の末、心重い筆を執り遲延として綴った一篇の物語を、いまここに公にせんとする。歴史の一齣への私の証言をなさんがためである」「自ら進んで天下の法廷の証人台に立つ」というその決意は、若泉先生の人生の「真骨頂」といえましょう。

特に若泉先生は生前から「敗戦国日本」という言葉を随分使っていらっしゃいました。つまり敗戦と占領に直面した日本人というのは打ちひしがれたのです。卑屈になって、国のあり方と自己の否定がずっとこの70年続いてきたわけです。

この卑屈というものに対して、先生はそこに突破口を開きたい。もちろん歴史的な事実を残すということも大事ですが、卑屈であってはならないということを力説されました。

漢文学者で歌人の太田青丘先生が戦後間もない昭和22年の『潮音』で歌をお詠みになって、GHQから発禁になりました。それは「民族のこの忍従が百年の卑屈となるを我は恐るる」です。この言葉を僕は若泉先生からお教えいただいて、胸に突き刺さりました。

現世に生きる我々は心眼を開いて、死者の魂の叫びを忘れてはならない。ならば卑屈になっちゃいけないのだというところに、先生はこの『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』を何としても

公刊し、後世に伝えねばならないと、意を強くされたのです。

私は今も、そのように思っています。

所 ありがとうございます。だんだん時間が押しておりますが、最後にちょっと私から補足をさせていただきます。

私は若泉先生にお目にかかる機会が少なからずございました。最初は昭和42年、私はまだ皇學館大学の助手でありましたけれども、その秋に京都産業大学が単独でトインビー博士を招聘され、そして全国各地で講演などをなされた途中で、伊勢の神宮に参拝されまして、皇學館大学にも立ち寄られました。そのときに若泉先生が見事な通訳をされる姿を拝見したことがあります。

それから、産業大学へ赴任したのは昭和56年ではありますが、若泉先生はそのころまだ講義をお持ちでありましたから、授業が終わられた頃を見はからって教員控室を訪ねますと、いろいろなお話をしてくださいました。

そういう私的な思い出に加えて、先生が晩年に書き残された『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』英文版の序文に強い感銘を覚えました。これは日本語が産経新聞社の『正論』平成18年9月号に出ておりますが、その中にあるお言葉をぜひとも皆さんにお伝えしたいと思います。

その一つは「戦争の若き悲劇的英雄たちが生あらば共有したであろうこのロマンと希望、夢と理想の未来図の礎石を次の若い世代にきちんと引き継ぐために、我々は真剣に考えて、あすのために最善の努力をささげようではないかと提言したいと思う」と、特に若い世代の人々へ熱い期待を込めて述べておられます。

もう1カ所は、沖縄に対するメッセージでもありますが、最後のほうでこう言っておられます。「この日米関係を含めて日本と世界との関係を考える上で、真に対等な日米関係の抜本的再構築の必要を説いたことに注意を喚起しておきたい」。これは『他策ナカリシヲ信ゼント欲ス』初版の跋文に書いておられることですが、それを改めて引かれまして、「敗戦と占領以来、米国軍隊がそのまま居座る形で今日までいわば惰性で維持されてきた日米安保条約を中核とする日米友好協力関係を国際社会の現状と展望の中で徹底的に再検討し、長期的かつ基本的な両国それぞれの利益と理念に基づいて再定義することは不可避であり、双方にとって望ましく、かつ有意義なことであろう。そしてこの作業の大前提として、私はまず日本人が毅然として自主独立の精神を持って、日本の理念と国家利益を普遍的な言葉と気概を持って、米国はもとよりアジアと全世界に提示することから始めなければならないと信じている」と述べておられます。

私はこれを拝見しましたときに非常な衝撃を受けました。えてして私どもはアメリカとの関

係がよければそれでよしとする傾向がありました。けれども、若泉先生は、日米関係をも再構築する、しかも、その前提として、我々自身が自主独立の気概を持たねばならん、ということをお説きされています。このことは、当然と言えば当然ですけれども、アメリカが日本を守ってくれるというのは、日本もアメリカのために出かけていくことがなければ、対等の二国間関係、国家関係になりえません。今のところ憲法の制約もありますが、他人・他国に頼ることによって自分・自国の生をむさぼって恥じないという戦後の風潮をしっかりと考え直してくれ、ということをお説きするのを恐らくあの世から若泉先生は願っておられるのではないかと思います。

それでは、時間が残り僅かとなりましたけれども、先生方、これだけ言い残したということがございましたら、手短にお願ひします。

佐伯　　ちょっと質問の中で1点こういうのがありました。『当時の沖縄県民は日本への復帰を心底から望んでいただろうか。その点若泉先生はどのように考えておられたでしょうか』となっています。

これは残念なことですが、『琉球新報』、『沖縄タイムス』の報道は非常に一方的な見方しか伝えてないのですが、沖縄復帰運動のときに末次一郎先生が日の丸を贈る運動を自ら作られた日本青年会を通じて昭和28年頃からやっておられた。これは沖縄県に小・中学校が552校もあったのですが、全校に復帰前に末次先生は沖縄に日の丸を贈っておられました。そしたらどうという反響があったかという、「沖縄の教師や子どもたちから寄せられた感動的な便りは、祖国から切り離された人々の抱いている悲しみや苦しみを教えてくれた。贈った日の丸を仰いでこの人たちの素直な喜びは、逆に国旗を粗略に扱っているそのころの本土の風潮に対する厳しい戒めでもあった」と末次先生がご自分で書かれた『戦後への挑戦』という本の中で述懐しています。

若泉先生の部屋には日の丸の旗を持って歓迎している沖縄のおばあちゃんの写真がずっと死の間際まで掲げておられました。そういうふうには沖縄の人はやはり「日本に復帰できる」ことを心から歓迎していたと思います。「今の沖縄県民の心を本当に今の新聞が伝えてくれているのか」といったら、全然そうじゃないと思います。沖縄の新聞は、自分たちの新聞の主張に合う声しか載せていないように見える。反対の声には全然耳を貸そうとしないのではと。僕はこういうマスコミの態度では、日本の将来を危うくするのではないかと。そこを憂えております。

所　　ありがとうございました。そういう話が出ますと、一言だけ付け加えたいことがあります。私は昭和42年8月中旬に初めて沖縄へ参りました。本土復帰5年前ですが、屋良朝苗先生を表敬訪問しましたところ、先生が「見てください、今まで我々は日本の国旗を自由に掲げるこ

とができなかったけれども、今ようやく、我々は国旗を掲げてよいという許可をえました。しかし、許可なくして日本の国旗を掲げられるように早くなりたいと思います。」ということをおっしゃって、私は非常な衝撃を受けました。

その後、私は友人と共に、沖縄の遺骨収集に4回まいりましたが、行くたびに重い課題を背負われました。それは現地へ行ってみないとわからない。沖縄の問題は、沖縄の人々が大変な悲しみ苦しみに苛まれてきたことを如実に理解しなければなりません。一族20何名のうち10数名亡くなっている方がおられるのです。私が遺骨収集でお世話になった敗戦当時15歳の方は「自分の両親も祖父母も兄弟もみんな亡くなった。それでも自分が皆さんに協力しているのは、やっぱり人間として皆さんの真心に答えようという思いです。もう一つは、昭和50年以来、今の両陛下が沖縄へ来てくださって、何とか沖縄の気持ちを理解しようとしてくださっている。その態度から、本当に我々を忘れないで、我々を分かろうとされているのだな、という思いを汲み取ることができた。我々はいまだに大和人（やまとんちゅう）が気に入らんけれども、天皇・皇后陛下は大好きだ。」と言われました。そういう沖縄の人々の思いは、現地へ行って一緒に話を聞いてみないとわからないことです。

それを若泉先生は、沖縄の本土返還に一旦成功されましたけれども、なお残った問題を痛切に感じられて、それで沖縄に行って慰霊も遺骨収集もされました。そして最後の力を振り絞って英文の序文を書かれたりしたのです。

その思いを考えると、本当に今、我々は沖縄問題と真剣に取り組まなければならない。決して他人事ではありません。我々自身の在り方が問われているのです。

そういう意味でも、今日こういう記念講演及びシンポジウムができたことは、単に若泉先生のためでなくて、現代に生きる者、我々のためにも本当に意味があると思っております。

以上をもって終わらせていただきます。長時間ご清聴ありがとうございました。